

關西鐵道は大阪湊町を起點として當驛に到り本線に接續するから關西に因り伊勢參宮、奈良見物等とする人はこゝにて乗替をせねばならぬ又別に名古屋を起點として美濃の多治見に向つてゐる鐵道がある之は所謂中央線である

名古屋市 は三府に亞げる都會にして夙に小江戸と稱へられ愛知縣廳の在る所です維新前には徳川御三家の一で六十二萬石の舊城下にして西は清洲より東は熱田まで凡う三里の間人家接續し百貨輻輳して車馬織るが如く水陸運輸の便極めてよく近來は工業盛に行はれ人々漸く増加して二十四萬四千餘に達した、旅館には名古屋ホテル。山田屋。支那忠。丸文、三嘉樓。鶴鳴館。錢屋等を始めとし數十軒一々記るに遑なし。市内の遊覽所は大須の觀音。博物館。東西本願寺別院。東照宮等にして稍離れたる所には豊臣秀

吉の誕生地中村。八事山。龍泉寺。甚目寺等がある

名古屋城 は海内無双の名城にして加藤清正の設計により慶長年間徳川義直の建築せし所です其天主閣の瓦は皆銅にて作られ屋の頭には有名なる金の鯨鏢一双を置いて燦爛たる光は八方を射る鯨は高八尺五寸胴の周り七尺三寸黄金二千九百四十枚を熔かして造つたもの封建時代の遺物として最も見るべきものゝ一です城内には今第三師團が置れてある

清洲驛 上り名古屋(四哩三十九鎮) 新橋より二百三十九哩六十八鎮
下り一ノ宮(六哩三鎮) 神戸より百三十七哩二十五鎮

驛は尾張國西春日井郡清洲町にあり

小牧山 は驛の東北三里に在り平野の間に唯一つある山です天正十二年徳川家康が信長の遺孤を助けて豊公と對陣せし地なるを以て殊に著はれ近年に至り公園地となつたので遊覽に出掛けるものも

多い

小牧山

寺西易堂

東西不見古軍營。村落秋成表太平。

小牧山連長久手。車夫指點說天正。

一ノ宮驛 上り清洲へ六哩三鎖 新橋より二百四十五哩七十一鎖
下り木曾川へ三哩四十三鎖 神戸より百三十一哩二十二鎖

驛は尾張國中島郡一宮町大字一宮にあり

木曾川驛 上り一ノ宮へ三哩四十三鎖 新橋より二百四十九哩三十四鎖
下り岐阜へ四哩六十二鎖 神戸より百二十七哩五十九鎖

驛は尾張國桑柰郡黒田村の北方にあり木曾川の岸を去ること二十町

木曾川 は本道五大河の一にして流程五十里源を信濃の木曾山中より發し美濃を過ぎ尾張の西境に至り佐屋川を分ち楢葉川を合せ下

流數派に分れて伊勢の海に入る

岐阜驛 上り木曾川へ四哩六十三鎖 新橋より二百五十四哩十六鎖
下り大垣へ八哩五十六鎖 神戸より百二十七哩七十七鎖

驛は美濃國の西南部に位せる岐阜市西吉津町にあり

岐阜市 は長良川に臨み稲葉山を控へ市街整然として商業盛に行

はる貝原益軒の著木曾路の記に岐阜の風水は京都の清水より西山を望むによく似て景色よしと云つてある人口三萬一千許り岐阜縣

廳の在る所です明治二十四年の大地震に市街は頽廢に及んだが近年に至り大概舊に復した名産は岐阜提燈團扇縮緬を出し長良川の

鮎は其風味冠絶し遊覽所には伊奈波神社。金華山篠原の梅林等がある又旅宿には小橋屋。玉井屋。津國屋等重なるものです

稲葉山 は一名を金華山といひ岐阜市の東一里許りの間六曲の翠屏を引廻した様に見へる山の北に織田氏の城址がある

僧尊住

麓よりつづく田づらのいなば山みどり涼しき峰の松風

岐阜山は青田の上の稲葉かな

支 考

城跡や古井の清水まつ問ん

芭 蕉

長良川の鵜飼 昔より有名なる長良川の鵜飼は毎年五月上旬より

九月中旬までの暗夜に松火を點じたる漁船が五艘より七艘まで

を一隊となし流れを下り鵜を放ちて鮎を捕らしめる其進退操縦の

自在にして目覺しきこと海内無雙の壯觀です

寂蓮法師

鵜かひ舟かた瀬さしこそはどなれやむすはほれゆく篝火の影

細川幽齋

あまつ星くもりゆくかといさり火の影見ゆるむるをちの夜川に

おもしろうてやかて悲しき鵜舟かな

鵜の罪もわすれん雪の長良川

芭 蕉 支 考

聲あらは鮎もなくらん鵜飼船

越 人

鵜糺はす垣の雫や花木榿

蝶 夢

長 良俗謡

私や長良の船頭の娘船も櫓も漕く權もひく

大垣 驛 上の岐阜(八哩五十六鎖) 新橋より二百六十二哩七十二鎖

驛は美濃國安八郡大垣町にあり

大垣町 は戸田氏の舊城下にして人口二萬餘りの繁昌なる都會です

旅宿は王屋。安田屋。新玉屋等です

養老瀧 は驛の西南三里多藝郡の山中に在り高九丈二尺幅二間許り

極めて壯快なる觀ものです三伏に暑を忘るゝは言はずもかな山中

亦櫻楓に富み春秋の遊びもよろしい今は公園地となつてゐる

養老瀑

梁川星巖

養老改元光武史編。至今百丈瀑泉懸。寒風珠玉噴爲雨。白日雷霆轟在天。

照山元瑤禪尼

根せりつむこれや千歳のたねならむ老を養ふたきの流れに

富士谷御杖

田跡川におちくる瀧の下かせの千里のほかに吹かむとや見し

常 繁

酒の氣はだんくさへてるひさめの水もまたよし養老の瀧

貞 室

瀧殿はたゞ涼風をまくら哉

蝶 夢

養老や齒のなき我も水むすふ

假 興

尾花かる翁よ瀧に幾世すむ

去 來

谷汲寺 は大垣の北六里許り大野郡徳積村の山中谷深く道険しき所

去 來

にあり西國三十三所最終の觀音を安置してある寺です

去 來

順禮もしまふや襟に鮎のめし

去 來

那智出しころはむかしや更衣

去 來

蛇も衣ぬき納む御庭かな

去 來

垂井驛 上り大垣へ五哩三鎖 新橋より二百六十七哩七十五鎖 下り關ヶ原へ三哩四十二鎖 神戸より百九哩十八鎖

去 來

驛は美濃國不破郡垂井町にありて中仙道の一驛に方り驛内玉泉寺の前

去 來

前垂井清水といふのがある

去 來

昔みし垂井の水はかはらねどうつれる影る年をへにける

去 來

ぬくき日やたる井にしはし休らはん

去 來

南宮神社 驛の南十二丁許りに在る國幣中社にして祭神は金山毘古命です壬申の亂に天武天皇の行幸遊ばされし所其後又平將門

及阿倍貞任の亂にも當社に祈りて靈驗ありとて歴朝の崇敬淺からずるれゆる祭儀も盛んに行はれたるものです本社ほんしやの側かたはらに神木しんぼくと稱する白玉椿しらたまつばきがある

關ヶ原驛

上り飛井へ三哩四十二鎖 下り柏原へ四哩三十四鎖

新橋より二百七十一哩三十七鎖 神戸より百五哩五十六鎖

驛は美濃國不破郡關ヶ原村大字關ヶ原にあり

關ヶ原古戰場

とは驛の近傍一里餘に亘れる原野の稱で一名不破野

ともいひます今を去ること三百四十年前慶長五年徳川家康と石田三成とが激戦の地で「原草爲ニ赤シ」と云ひし三大古戰場の一つであると沿く人の知るところです

關原

太田錦城

仁人無敵有誰爭。烏合三軍何所成。

五百餘年昏濁世。一朝四海屬清明。

伊吹山

は驛の北二里の外に屹立せる國中第一の高山にして其高さは五千尺既に熱田驛の部に記せし如く日本武尊が兇賊退治に向はれたのは此山です山中藥草を産し伊吹艾は此山から出るので

藤原實方

かくとだにぬやは伊吹のさしもくささしもしらしなもゆる思を

其ままに月もたのまし膽吹山

芭蕉

涼風を青田に下す伊吹山

支考

はつ雪や柿に粉のふく伊吹山

許六

寝物語の里は驛の西一里半美濃と近江との境にあり一名を車返し

ともいふ此地は美濃近江の兩國より人家を近く作り列べてたゝ其間に小溝一つを隔つるのみですから國を隔てながら寝物語が出来るといふ意味から里の名が起つた

両の手に美濃とおふみや鳴子引

夏の日なつひに寝ねものかたりや棒ぼうまくら

ふむ足あしやみのもと近江あふみに草くさの露つゆ

近江あふみから尻しりくはせたる夜寒よさむかな

一聲ひびこえは美濃みのかあふみか郭公ほろこぎす

月つきをくむ相合あひあひ井戸いけやみのあふみ

●●●● 不破ふたの關せき は驛えきの西にし五ご町ちやうにあは天武帝てんぶていの時ときに設まうけられたる日本にっぽん三

關せきの一つひとつです壬申じんしんの亂らんに帝ていの兵へいと大友皇子おほともわうじの兵へいと戦たたかひしも此地このちに

して賴朝よりとも十三歳さいの時京都みやこの戦たたかいに打うちまけ關東くわんとうに落おつるを平家へいけの士彌しや

平兵衛へいべゑが生捕いけりしも亦また此地このちです

經ニ不破關廢址

梁川星巖

寒烟蔓草喚愁生。 不破關空星巖更。

尋訪遺蹤迷處所。 曾經大駕此巡行。

山霞想像朱旗色。 野水依稀玉珮聲。

唯有輪古時月。 清光偏向夜深明。

大中臣親守

霰あられふる不破ふたの關せきやに旅たびねして夢ゆめをもぬころとをささりけん

藤原清忠

今はとて立たちかへり行古郷ゆくふるさとの不破ふたの關せき地に宮みやこわするな

こからしやはり合あひみなさ不破ふたの關せき 三千風

あさ風かぜや敷やぶも畑はたけもふはのせき 芭蕉

燕つばくろの巢すをはじめたりふはのせき 言水

三月ごわつに萬歳まんざい見みたりふはのせき 汝村

不破ふたの月つきひるは日ひの漏もる暑あつさかな 也 有

柏原驛 上り彌ヶ原へ四哩三十四鎖 新橋より二百七十五哩七十一鎖
下り長岡へ二哩五十鎖 神戸より百一哩二十二鎖

驛は近江國坂田郡柏原村大字柏原にあり

長岡驛 上り柏原へ二哩五十鎖 新橋より二百七十八哩四十一鎖
下り醒ヶ井へ二哩七十一鎖 神戸より九十八哩五十二鎖

驛は近江國坂田郡東黒田村大字長岡にあり

醒ヶ井驛 上り長岡へ二哩七十一鎖 新橋より二百八十一哩三十二鎖
下り米原へ三哩六十二鎖 神戸より九十五哩六十一鎖

驛は近江國坂田郡醒井村大字醒井にあり

醒ヶ井 是江州坂田郡にある木曾街道の一市邑です醒ヶ井の水は昔日本武尊東征の歸途伊吹山御登山の時其地にて毒氣にあたりて山を出でたまひ御心地わづらはしかりければ此水を飲みて即醒めたまひしよりしか名けたりと

さめかゝるの地藏や瓜の尻冷し

さめかゝるのここや扇の撫どころ

許 六 有 也

米原驛 上り醒ヶ井へ三哩六十二鎖 新橋より二百八十五哩十四鎖
下り彦根へ三哩五十七鎖 神戸より九十一哩七十九鎖

驛は琵琶湖の東北岸に臨める一小市にして東海道線より北陸線の分岐するところ福井。金澤。富山。七尾等へ行く人は茲にて乗替ねばならぬ旅舎には井筒屋がある

彦根驛 上り米原へ三哩五十七鎖 新橋より二百八十八哩七十一鎖
下り河瀬へ三哩十九鎖 神戸より八十八哩二十三鎖

驛は江州犬上郡青波村に屬し湖の東岸にして近江鐵道の基點ですから同線路に沿へる多賀神社。瓦屋等へ參詣する人は茲にて乗替へ

彦根町 是井伊氏三十五萬石の舊城下にして琵琶湖畔に位し人口一萬九千許り水陸の運輸交通共に便利よく國內屈指の市街です

彦根城は一名金龜城と稱へ慶長年間の建築ですが今は只牙城を存するのみで先年大に修理を加へ公園にしてある天主閣に上つて眺めると伊吹比叡の高峰より湖中の風光に至るまで一眸の中に入り

頗る絶景です旅店は樂々園、八景亭等です

●多賀神社 是驛より東高宮を経て二里許り多賀村に在り官幣中社で

伊弉諾、伊弉册の二尊が祭つてある境内には老杉茂り最と神寂び

て神威の尊さを覺ゆる當社は命乞の神又は壽命を司り玉ふ神な

りとして遠近より參詣するもの常に絶ぬ

木杓子や多賀は實も有花もあり

道はたに多賀の鳥居の寒さ哉

時雨する空や女中の多賀参り

河瀬驛 上り彦根へ三哩七十九鎖 下り能登川へ四哩四十六鎖

驛は近江國犬上郡日夏村にあり

能登川驛 上り河瀬へ四哩四十六鎖 下り八幡へ五哩三十鎖

驛は近江國神崎郡能登川村にあり

八幡驛 上り能登川へ五哩三十鎖 下り野洲へ五哩七十五鎖

驛は近江國蒲生郡八幡にあり

野洲驛 上り八幡へ五哩七十五鎖 下り草津へ四哩五十六鎖

驛は近江國野洲村大字野洲にあり

舊街道五十三次は次の草津驛にて再び本線と一所になる

草津驛 上り野洲へ四哩五十六鎖 下り馬場へ六哩四十三鎖

●第五十三次の草津 水口へ二里二十五町 大津へ三里二十七町 京都より六里十六町

驛は近江國栗太郡草津町大字草津にあり

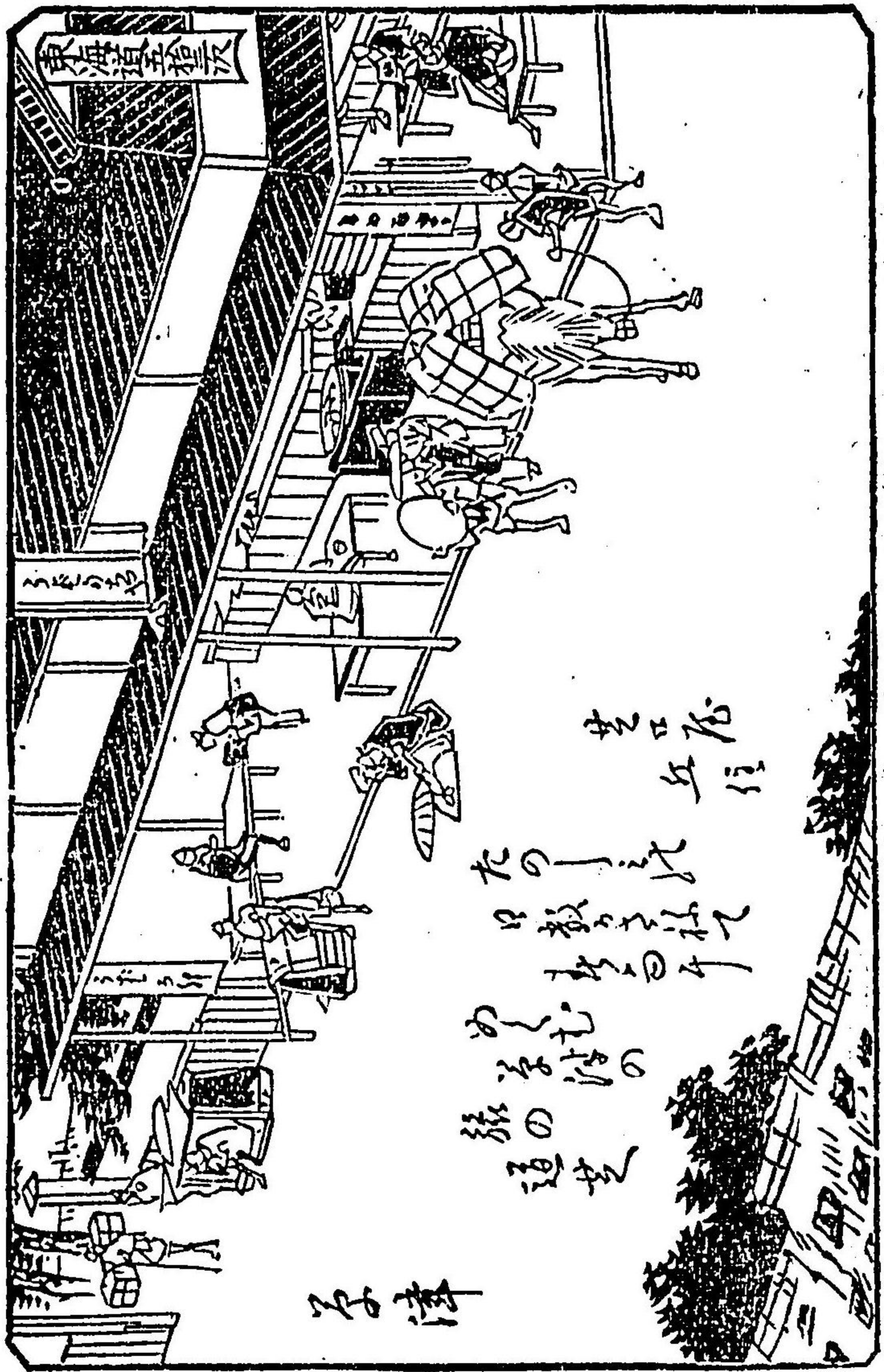
●草津村 是東海中仙兩道の分るゝ所にして東海關西兩鐵道も亦此處

にて岐れ東海道第五十二の驛次に方り商家旅店軒を並べ人口五千

許り名物姥ヶ餅は今も賣つてゐる旅店には魚清、中村屋等がある

草津

山崎閣齋



草津不問趨。

族子立迎レ吾。

行看郷雲上。

此達七里餘。

爲村脚

草津初春狂詠

中村兎山

こよひかはる草津の里の旅まくらむすひもなれぬ露ういふせき

春はるにわかう祝はん若草のくさつにとしふる姥が餅をも

駒牽のあきや草津の姥か餅

たひ人に亥の子幾人うばか餅

三上山 は梅の木の北一里許りにあり俵藤太の故事により俗に百足山といひ又其形の似たる所から近江富士とも稱へてゐる

三上山一名百足山

林春齋

經過三上一山阿。 百足馬蜃曾作魔。

不被夔憐一無笑龍。 勢多橋下欲喰蛇。

藤原季經朝臣

常盤なる三上の山の杉村や八百萬代のしるしなるらん

三上からあろひに出るやしくれ雲 柳 居

冬かれや是齋か庭にみかみ山 曾 秋

野路の玉川の舊跡は驛の西南半里許り街道の側にある

仲 光

さを鹿のしがらむ萩に秋見ひて月も色ある野路の玉川

俊 頼

明日もこむ野路の玉川萩越ひて色ある波に月やどりけり

紹 巴

陸奥ちどり武藏手づくり近江萩山々吹に紀毒津の卵花

こぼれてもまた玉水る萩の露 翠 色

萩かれて狼川のうき名哉

乗懸の游くやうなり萩の波

馬場驛 上り草津へ六哩四十三鎖 下り大谷へ一哩七十二鎖

●五十三次の 大津 草津へ三里二十七町 日本橋より百廿五里十四町 京都より二里二十五町

驛は大津市の東部馬場に在り近江八景を見物し又は疏水を下りて京

都に出でんとする人は此所にて下車せねばならぬ

●大津市 は近江國の西南隅に在り琵琶湖に臨み逢坂山を負ひ京都へ

は僅かに三里足らず東海道五十三次の最終驛次に當り人口三萬四

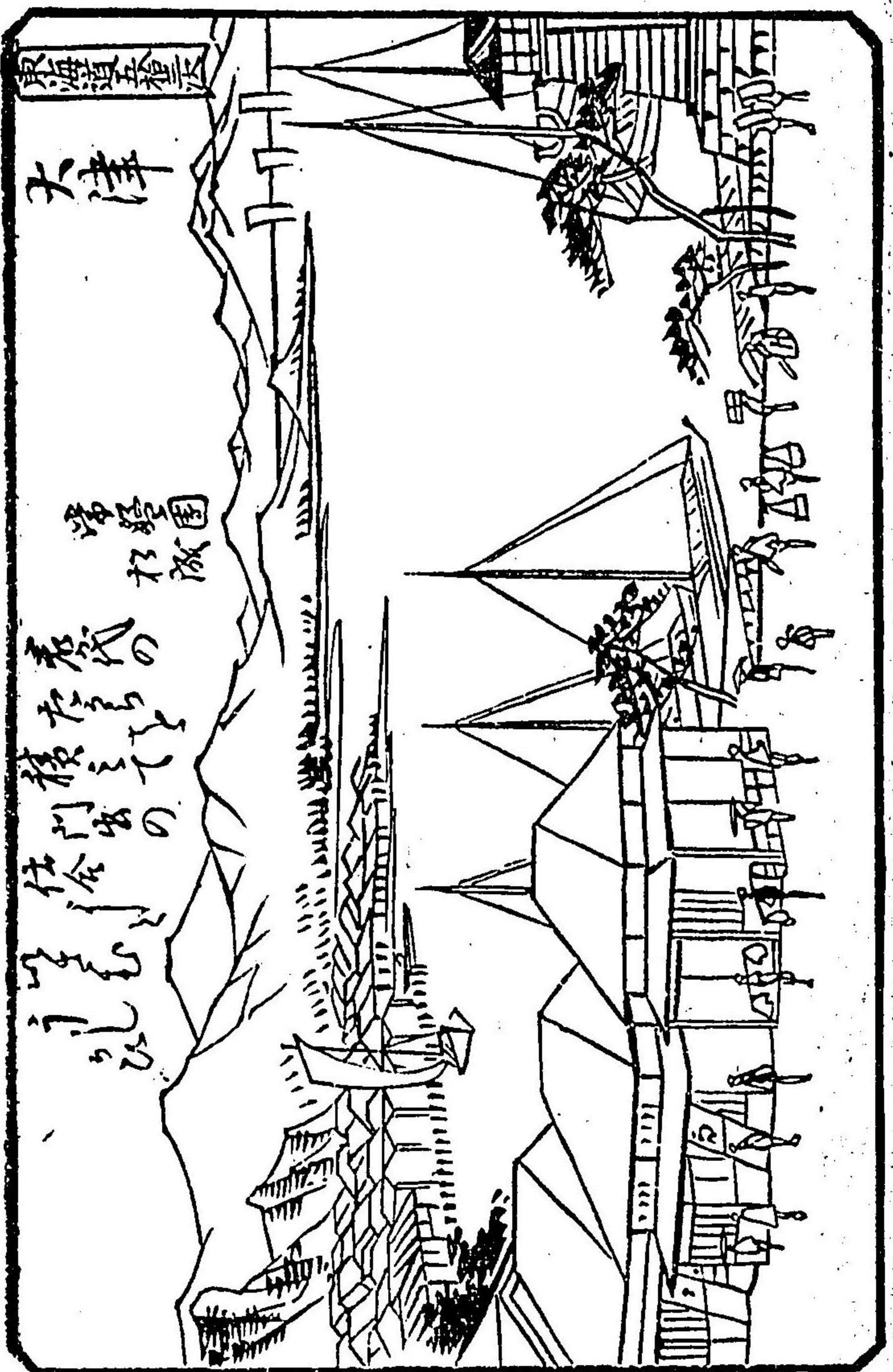
千許り滋賀縣廳の所在地で市街繁盛、商家軒を並べ國中第一の都

會です湖上には波止場より彦根。長濱。今津等へ往來する汽船あ

り交通運輸二つながら便利にして名産は茶と鮎とです

大津

山崎 閻 齋



大津通ニ海陸一 南北與ニ東西一 雙俟恰如待 四來人不迷

隆 祐

秋の日もなから山の山のみち葉は天津の里のかさしなりけり

大津初春狂詠 高瀬桃行

今朝春におほつのはつとは一面に琵琶の海より霞ひくらん

名月や天津の人の人かまし 尙 白

千觀の馬もせはしや年の暮 其 角

志賀の都趾 是滋賀村大字錦織村にあり廣さ二町四方許り小高き地
がるれで字を御所跡と云てゐる

高市 古人

ふるひとにわれあらめやもさ波のふるさ都を見れば悲しき

前大僧正 忠源

神よいかにかに都の月に旅ねしておもひや出るしかの古里

前大納言經輔

戀しさも忘れやはする中々に心さはかす志賀の浦波

志賀狂詠 金 埒

雪ならはいくら酒ををねたられん花のふぶきの志賀の山麓

同 霜 解

盃にささ浪うくる泡までも心してふけ志賀の花ろの

案山子ひとり烏帽子着たり志賀の京 三 千 風

花に今眼入りけり滋賀の浦 去 來 風

釣はし菜むかしなからの軒端かな 蝶 夢 來 風

秋たま〜躑躅花さく滋賀の里 蕪 村 夢 來 風

打出の濱 とは京都の方より逢坂山を越えて初めて湖水へ打出る

濱邊のと

大伴 黒 主

ささら波ひまなく岸をあらふなり渚さよくはきても見よとや

後 鳥 羽 院

駒なへて打出の濱を見渡せば朝日にさはぐしかのうら波

寄打出濱歳暮狂詠 花 卿

音さけは早や一とせのはて太鼓打出の濱の浪もどんど

膳所 は驛より三町許り東に當る湖岸の市邑にして本多氏の領せし

膳所城がある此地は山王祭に神供を献る由縁によりかゝる地名を

つけたさうです

膳所城 古云三粟津一 是也 林 春 齋

粟津昔聽 勇 夫 疲。 膳所今看 武 備 奇。

城有利兵堅甲在。况將湖水作湯池。

すすしさや八景にかく膳所の城 許 六

鯉鮒の青葉につくか城の陰 正 秀

琵琶湖は我國第一の大湖にして東西五里南北十六里周回六十里で

別に鴉の海志賀の海と稱へ國內の川々すべて茲に注ぎ其水は流れ

て勢田川及び疏水となつてゐる湖中に奥。沖。多景。竹生の四ッ

の島があつて風景殊に宜し湖上には汽船あり沿岸の各邑を往來し

此湖より源五郎鮒を産す

琵琶湖上 筱崎小竹

晚過湖上氣如冬。裂面風從比叡峯。

八勝糶糊纒認一。烟中三井寺邊鐘。

家 隆

にはの海や月の光のうつろへは波の花にも秋は見ぬけり

湖の海やけふより春にあふ阪の山も霞て浦かせるふく 定 家

涙ころ近江の海となりにつれ見る目なしてふ詠せしまに 相 摸

あふみの海夕波千鳥なかなけは心もしのに昔かもほゆ 人 磨

ささ波や風のかほりの相拍子 芭 蕉

梅さくら九十九浦やにはのうみ 智 月

螢火や吹とばされてにはの闇 去 來

近江八景は湖邊の勝地で今を距ること四百餘年前明應年中に近衛

政家父子が支那洞庭の八勝に擬へて和歌を詠せられしに始り是よ

り有名となつた左に項を分けて記します

石山寺の秋月 は勢田の橋より南十餘町に在つて其幽邃なること宛
かも仙境に至れる心地、月によく登によく飽くことなきはこゝの
風景です紫式部が想を構へ筆を下し源氏物語を著はしたのは此所
です

石山秋月

林 長老

秋風蕭颯 一天涯。 霜滿四山不帶霞。
古木回岩寒月影。 吟殘葉々霧中花。

石山秋月

近衛時熙

いし山やにはほの海てる月かけは明石もすまも外ならぬかな
月見にはなと籠らすや悪源太
あきのくれ石山寺の鐘の傍
嵐 酒 堂
雪

瀬田の長橋 は勢田川の上に架り川の中程に小島ありて大小二橋と
なり大橋は長さ九十六間小橋は長二十三間欄干の擬寶珠古色を帯
びて風韻に富む又た別に青柳橋、長橋、轟橋、斷橋などの稱も
ある

熱田夕照

林 長老

沙鳥風帆帶夕陽。 夕陽人影與橋長。
勢田曝網東山月。 一色江天兩景光。

近衛時熙

露しぐれもり山遠くすぎさつ夕日のわたるせたの長はし
兼 盛

御調物絶するなふる東路のせたの長橋音もとどろに
さみだれにかくれぬものや勢多のはし 芭 蕉

雁のつら崩れかかるやせたのはし

北 枝

幾人か時雨かけぬく瀬田のはし

丈 草

夏の日を事とも勢多の水の色

鬼 貫

木からしやせたの小橋の塵も渦

其 角

寄瀬田橋歳暮狂詠

淨 鑑

來るとしどくれゆく年の中をけふ隔て、越すや瀬田の長橋

粟津の晴嵐 は馬場驛の東三町許り膳所に行く途中の松原をいふ此

地は木曾義仲か源範頼及び其弟義経と戦ひ討死せし所です又其近くの義仲寺には義仲の墓及び俳祖芭蕉翁の墓もある

粟津晴嵐

林 長老

嵐度粟津春興長。吹霞吹雨似相狂。

山花片々一蘆浪。湖上閑鷗夢亦香。

近衛時熙公

雲拂ふあらしにつれて百船も千ふねも波のわはつにるよる

頼阿法師

あふ坂の鳥の音遠くなりけり朝露かはるあはづのゝはら

樓 雫

寄粟津松原歳暮狂詠

大節季せせもあるからぬれ手にてつかむ粟津の松原の暮

支 考

わか好の粟津か原やなく鶉

柳 居

晴嵐の粟津も今や煤はらひ

平野五岳

義仲寺 奇勳歴例大頭公。深惜先鞭不善終。想像將軍當日恨。芭蕉墓畔立秋風。るの春の石ともならて木曾の馬

雪消てあはれに出し朝日塚

智 月

芭蕉塚

木曾殿と春中合せの寒さかな

又 玄

なまきからを笠にかくすや枯尾花

其 角

此下にかくねふるらん雪はどけ

嵐 雪

朝霜や人參つんで墓参り

去 來

草の戸をしれや穂蓼に唐からし

芭 蕉

矢橋の歸帆 は草津の西一里許りなる湖畔にあり船舶出入の要津で

大津よりは湖上一里半日毎に汽船が通つてゐる

矢橋歸帆

林 長 老

釣竿手熟白頭翁。辛苦客船西又東。

幾度風帆歸去後。呂公榮達一盃中。

公 朝

ささ波や矢橋の舟の出ぬまにのりおくれしといろくから人

寄矢橋歲暮狂詠

月 舟

せい出してけふ一日に漕よせしとしの矢はせのわたし舟かな

聖靈もやはせははやし帆かけ舟

長 緒

矢橋のる人の心やとしの暮

梅 人

三井寺の晚鐘 は馬場驛より二十町大津の西部にあり寺號を長等山

園城寺と稱へ天台宗寺門派の本山です境内に天智大武持統三帝御

降誕の産湯に供せし井泉があるとところから三井寺といひ史上に名

高ひ寺で其古鐘堂には辨慶のひこすり鐘がある此地大津琵琶湖を

一眸の中に收め八景中の冠たるといふまでもない

三井晚鐘

林 長 老

湖面朦朧畫不成。昏鯨高閣出園城。
霞間好是客船月。十倍楓橋半夜聲。

三井晚鐘

近衛時熙

思ふろの曉契るはじめろとまづさく三井の入あひの鐘

七景は雲にかくれて三井の鐘

芭蕉

三井寺や俱舎よめかかると梅の花

許六

からひたる三井の二王や冬木立

其角

堅田の落雁 は大津の北三里五町舟車の便がある湖の岸に十四五間

突出でたる堂が浮見堂で頗る雅致に富み惠心僧都の草創に係り風
光絶佳仙境に遊ぶの思ひがある

堅田落雁

林長老

鴻雁幾行更不孤。晚風帶月落東湖。

囊沙背水堅田浦。

猶見孔明八陣圖。

堅田

頼山陽

麥畝漁莊隔岸呼。晴波一束似胡蘆。

平生漫讀天正記。始信濃軍飛渡湖。

宗成

つひに又浮名やたれたん逢事はさても堅田の浦のあれた波

帆かけ舟あれやかたれたの冬景色

其角

いさよひや海老煮るほどの霽の闇

芭蕉

鎖明て月さし入れよ浮御堂

芭蕉

比良の暮雪 是比叡山の北に方り高く中天に聳ゆる大津より麓まで五

里許り麓より頂まで一里十五町直立二千八百八十尺近江第一の高
峰で雪を以て名高く初冬より春の彌生まで常に雪を戴き京都より

鮮かに見わたる

比良暮雪

林 長老

吹入雲兮飛入波。 比良嶺雪暮江寒。
輕舟短棹興何盡。 莫作剡溪一樣看。

近衛時熙

雪はるゝ比良の高根の夕ぐれは花のさかりにすぐる頃かな
初雪や四五里へたてて比良の嶽
風雲や時雨をくたる比良の面

去 來

湖の鏡にさむしひらの雪
唐崎の夜雨 は湖の西岸に方り大津より北一里許り下坂本村にあり
湖の岸に唐崎神社ありて大己貴命を祀り社頭には一ツ松がある

丈 草 考

「此松は元天智帝の御手栽であつたが中頃枯れて今のは豊臣秀吉の

命により天正年間新庄直頼が栽ゑたのださうです幹は一本にして
て枝葉八方に繁り南北二十間東西二十七間に亘り數百の柱にて枝
を支へ實に世にも稀なる名木です深夜になれば露を雨らせるから
夜の雨とも云つてゐる

唐崎夜雨

林 長老

澗澗湖光朝露晴。 玲瓏山色暮雲橫。
唐崎一夜換稜手。 半作松風半雨聲。

近衛時熙

夜の雨に音をゆづりてゆふかせをよるにふたつる唐さきの松
見せばやな志賀のからさき麓なるなからの山の春の景色を

慈 圓

從二位爲子

唐崎やかすかに見ゆる真砂地にまがふ色なき一本の松

唐崎の松は花より朧にて 芭蕉

唐崎やとまり合せて初しぐれ 随友

からさきや雪の中なる雪一木 桂阿

日吉神社 は大津町より北一里許り坂本村に在る官幣大社にして本

宮には大山咋命を祀り以下七の宮まであり社殿の結構宏壯にして

善美を盡し毎年四月中旬の大祭には七社の神輿は乗船して唐崎

の御旅所に渡る之を山王祭と稱へ参詣人の群集すること夥たし

く近江第一の賑ひです

爲相

世々をへてあふく日吉の神かさに心のぬさをかけぬ日ぶなき

民部卿爲藤

行めぐり照らす日吉のかけなれば限もあらし敷島のみち

見歸れば山王一社はつしくれ 蝶羅

六月の雲を拜むや八王子 曾秋

大谷驛 上り馬場へ一哩七十二鎖 新橋より三百二十一哩七十一鎖

驛は馬場驛より大津を過ぎ逢坂山の隧道を通り抜け出口の大谷町に

あり

逢坂山 は大津町の南方近江山城の通路に當り古より有名の地に

して古歌多く街道には關明神蟬丸祠關清水等の舊跡がある

三條右大臣

名にしおはい逢坂山のさねかつら人に知られてくるよしもかな

定家

湖らみやけふより春にあふ坂の山もかすみてうら風ろふく

寄逢坂山歲暮狂詠

花 交

大節季用はあとからあふ坂の山は世世話しゆくも歸るも

あふさかの松ぬるゝは霞けり 許 六

走井 は大谷茶店の軒端にあり此水は後の山より茲に走り下りて湧

き出で其水四時に増し減りなくしかも甘味を帯びてゐるから往來

人は之を掬ひて渴を潤す

清 原 元 輔

走井のほとをしらばやあふ坂の關引こもるもふかけの駒

兼 昌

走井のかけ樋のきりはたなひけとのどかにすめる望月の駒

逢坂關 逢坂山の峠より少し東尼寺の邊をいふ文徳實錄に同天皇

元年 初て逢坂關を建る關守十二人又寺門より又壇衆二十人兵具

嚴重に飾て金剛力士の如く忿怒の眼を張て及び居ると見えてゐる

逢坂關 時間孟冬初三日天子讓位子春宮一故未旬及此云

林 道 春

萬馬兆民常往還。洛陽江介兩山間。

君王内禪日尤近。闔國承平不固關。

左京太夫道雅

あふさかは東ちどころ聞しかと心つくしの關に有ける

平政村朝臣

都出てけふ越るむるあふさかの關や旅ねの始なるらん

あふさかのせきたてもゆく花見哉 宗 因

關こぼしてしるもしらぬも裕かな 涼 菟

關寺小町の蹟 は相坂片原町阿彌陀堂の在る所をいふ

小野小町

日くらしのなく山里の夕くれは風より外にとふ人ろなき

あるはなくなきはかするふ世中にあはれ何れの日までなげかん

●●● 關清水 は逢坂の峠弘法大師火除名號石の傍にあり

貫 之

あふ阪の關の清水に影見にて今や引らん望月の駒

寄關清水歲暮狂詠 米 谷

かけとりはこそせとてせがむ此關の清水のすめる暮はよけれと

水うみの目をほろめたる清水哉 鳥 醉

湖のあるに押あふしみつかぬ 其 秀

●●● 關明神 は街道の傍にありて祭神は猿田彦命と蟬丸の靈とを合せ

祀る

逢 阪原三首 山崎闇齋

知不知逢阪關。 明神即是蟬丸。

詠歌膾炙人口。 知不知逢阪關。

これやこの行も歸るも別れては知るもしらぬも逢坂の關

蟬 丸

世の中はとてもかくても同じこと宮もわらやもはてしなければ

蟬の聲宮も藁屋も雪隠も 不 角

流泉の曲とこそさけ夜の時雨 花 婆

されはこそ宮もわらやも同じ霜 重 厚

山科驛 上り大谷へ三哩二十七鎖 新橋より三百二十五哩十八鎖

驛は宇治郡山科村にあり驛の近傍に赤穂義士大石良雄假居の舊趾が

ある

大石氏舊栖 釋 英

一刹那間不_レ忘_レ讎。 伴歌狂舞有_二由來_一。
百年人逝英魂遠、 竹雨松風尼寺秋。

兼輔朝臣

山科の宮の草木と君ならばわれは霏_レにぬるはかりなり

山科の五荷三束や菊の花 許 六

山科の梅のぬしなら名をかかせ 詠 竹

稻荷驛 上り山科へ三哩一鎖 新橋より三百二十八哩十九鎖
下り京都へ一哩六十三鎖 神戸より四十八哩七十四鎖

驛は山城國紀伊郡深草村伏見稻荷前にあり

稻荷神社 是驛の前面に在り俗に伏見の稻荷と稱へ其名最も著はる

社格は官幣大社祭神は倉稻魂命。素盞鳴命。大市比賣命の三座で

す當社は元明帝の御宇和銅元年二月午の日に倉稻魂命始めて稻荷

山三の峯に垂跡し其所に鎮座ありしを其後足利義教今の地に遷座

したのです境内廣く神殿壯麗にして各地方より來れる賽人絡繹と
して絶ゆることなく殊に二月の初午は參拜者夥しく爲に臨時汽
車を發します

平 定 丈

伊なり山社のかずを人とはつれなき人をみつと答へん

惠 慶 法 師

いなり山三つの玉垣打たたき我ねきことを神もこたへよ

十 返 舍 一 九

稻荷山松のふぐりにかかれるはふどしのさかり藤の森かな

鏡はさむいなるの翠簾や春の風 佐 丘

若葉なり奥もよくなる稻荷山 尺 草

伏見町 是驛の西南に位し京都より二里半淀川の南岸に在りて人口

は一萬七千許り市街京都市に接續してゐるのみならず水には高瀬川と疏水工事の鴨川運河とにより陸には電氣鐵道あり又大阪との間には淀川汽船毎日往復して交通運輸ともに便利です維新前までは汽船に代ふるに曳船ありて其上り下り晝夜たぬまなく現今に劣らぬ繁昌であつた伏見城址。桃山御殿跡。梅溪の觀月橋などの名勝舊蹟頗る多けれども一々之を記せず唯詩歌のみ一つ二つしるし置く

城墟看梅

藤本鐵石

滿溪梅樹占東風。暖靄吹香午景融。微醉一場花下夢。遙々魂繞藥珠宮。

俊成

伏見山松のかけより見渡せばあくる田の面に秋風が吹く

西行法師
わけて入袖に哀をかけよとて露けきにはに虫さへ不鳴

伏見狂詠

宗長

くれ竹のしげき伏見の蚊の聲やはらふにかたきちりの世の中

伏見初春狂詠

高井守由

としも今朝たつやふし見の明の旅のりかけなから馬ののりろめ

鬼貫

ふし見には町屋のうらになく鶉

臥高

鱒やくかさも伏見の時雨かな

何狂

菜の花や裏から這入る鐘木町

島棕隠

伏見船宿狂詩

茶竈煙暈吹碧漪。船家正是午餐時。客來已滿蓬間府。猶募私錢解纜遲。

十返舎一九

一刻を千金づゝの相場なら三十石の淀川の船

鳥羽の戀塚 下鳥羽にあり遠藤盛遠が誤つて袈裟御前を殺し其首

を葬りし所です

戀塚の穴出る蛇や夫婦つれ

戀塚は七つの外かはちたたま

こひつかに心ありてや男郎花

こひつかやこころもなけに春の草

淀村 伏見より西南一里許りに在り稻葉氏の舊城下にして淀の城

は世に名高きものなりしが維新の際廢城となり淀の河瀬の水車も

今はなし

花朝下三瀬江

藤井竹外

桃花水暖送輕舟 背指歸鴻欲沒頭。

雪白比良之一角。 春風猶未到江州。

まこも刈淀の澤水雨ふれば常よりことにまさるわが戀 貫 之

いつ方に鳴て行らん郭公よとの渡りのまた夜ふかきに 忠 見

都をは秋とともに不立初しよとの川霧いくよ隔てつ 匡 房

淀 川狂詠 一 朝

さみだれに淀川筋は水まして眞薦夜舟も引ずわづらふ 鬼 貫

朧く灯みるや淀の橋 宗 因

子規まつやら淀の水くるま

名月や汲ぬもさびき水車

言 水

宇治町 伏見驛の南二里五町許り宇治川の左岸にあり製茶の聞は高く又螢の名所です川に架けたる宇治橋は古より京師南方の要害にして源平の戦承久の争等常に争闘の地となり歴史上著名の地です平等院横島等見るべく訪ぬべき所頗る多し

宇 治

齋 藤 拙 堂

智勇人推一世雄 白頭學事戰功空

九原不起源三位 枯木花開春寺風 大江與俊

うち川の波にみなれし君ませは我も網代によりぬべき哉

忠 平

宇治川の底のみくづとなりながら猶くもかゝる山ろ戀しき

宇 治 狂 詠

宗 長

わが庵は都のたつみしかもすめ世をうちにしも何かくるしむ

宇 治 の 山 同

長 明

これもまた都のたつみ宇治の山山ころかはれしかはすみけり
高綱に鳴もぬからぬ羽音かな 怒 風

かしてさに合戦なしに飛はたる

許 六

茶摘とやむれくあかさ宇治の里

乍 木

山吹や宇治の焙爐の匂ふ時

芭 蕉

平等院鳳凰堂 天台宗にして宇治關白頼道の草創です其佛殿は有名なる鳳凰堂にして堂の形鳳凰の兩翼を伸べたるに似て其棟上には銅造り三尺許りの雌雄の鳳凰が在つて風に順ひ舞ふやうになつてゐる堂の内外ともに莊嚴美麗云はん方なく其建築は内外美術家

の嘆賞する處にして其摸形を北米市俄古の世界博覽會に出品して
から殊に著名となつた扇の芝は源三位頼政が自害した所で樓門の
内です

平等院

田中雲城

江邊何處訪餘風。 古墓草荒蕭寺中。
唯一篇遺咏在。 至今傳誦泣英雄。

頼政

埋れ木に花さくことはなかりしに實のなる果不哀なりけり
冬かれや平等院の庭の面

鬼貫

うら枯やあふきの芝のなをあはれ
草臥て尻に敷たる扇かな

宗雨

●黄蘗山萬福寺 は黄蘗宗の總本山にして宇治にあります而して其開

基は隱元和尙です和尙は明の福州の人承應三年始めて我國に渡り
寛文元年に當伽藍を草創されましたが其構造多くは彼國の風を
摸し殿堂樓門に至るまで頗る莊嚴を極めてゐます

黄蘗山

坂野耕雨

茗薺園ニ古寺。 春風芳ニ滿山。 臺殿丹雘駢。

白雲自爲關。 誰問西來意。 晝長僧影間。

黄蘗や通辭入らすのはととみす

隱元も日本ひいさのさくら哉

黄蘗に春の通辭や梅の花

京都驛

●五十三次の京 大津へ二十二里五町 日本橋より百二十八里三町

新橋より三百三十哩二鎖 神月より四十七哩十一鎖

驛は七條烏丸通りに在る一大停車場にして京都の名勝舊蹟を遊覽せ

んとする人は先づ此處に下車すべし
 京都鐵道は當所を起點として丹波の園部まで往復し又電氣鐵道は
 こゝより京都市内を通じ伏見まで達してゐます
 京都市は山城の中央にして平安城と稱へ加茂川に臨み人口卅五萬
 三千餘日本三府の一です此地は桓武天皇延暦十三年都を茲に遷し
 給ひしより以來七十一代千七十六年間帝都であつた所から今も東
 京に對して西京と呼んでゐる街衢は端正にして一條より九條まで
 の大路を通じ鴨川を東に控へ鞍馬山高く正北に聳ゆる比叡山は東に
 愛宕山は西北に峙ち南方一面は開きて伏見の方へ通じ自然の城構
 を爲してゐる又京都奈良兩鐵道と接續するのみならず琵琶湖の疏
 水工事成りし以來運輸交通便利となつて工業益々盛大となつた建
 築物には京都府廳を始めとし諸官衙學校會社銀行名社巨刹等の壯

麗なるもの枚擧に遑わらず見るもの聞くもの歴史に關係を有し學
 術の考證とならぬものはない山水は優美で風俗は閑雅で西陣織友
 禪染、粟出焼、團扇、扇子等内外に聞ゆし名産少からず世に美術
 工藝の淵藪といはれてゐるも虚言ではありません是等の名勝舊蹟
 は逆も寸紙の盡されぬところ又京都の事は別に案内記も出來てゐ
 ますから茲には唯概畧を記するのみです旅舎には也阿彌ホテル○
 俵屋○ 柊屋○ 萬屋○ 澤文○ 松吉○ 若彦○ 日光屋○ 西屋等を始め
 名高きもの十數軒ありて料理屋兼業には木屋町の玉川樓○大津屋○
 祇園の中村樓等です

發京師

中井竹山

畫戟青旛出護臺。平安城外曙光開。
 載毫千里虛隨遠。多愧翻々書記才。

静さや二冬なれて京の夜

あけほの、京の天氣や花の春

九重にみなれぬ雪の厚さ哉

上京やさぬたの中に蕭和琴

下京や雪つむ上の夜の雨

東山 ● は比叡山の支派南に走れる翠巒一帯の總稱で其麓より山腹に

かけて名社巨刹が澤山あります

東山春雨

森 春 濤

高寺低寺花相映。 前山後山路互通

煙雨樓臺春不鎖。 人行小杜小詩中。

蒲團着て寝たるすかたや東山

東山かすむや烟草はなのころ

嵐 雪 季 吟

若葉より入る浦出るひがし山
車にて花見をせばや東やま
古き繪のやうに霞むやひかしやま

涼 菟 其 角 松 雀 賴 山 陽

東 山

蒲團着て。寝たる姿はふるめかし。おきて春めく知恩院。ろの
樓門の夕ぐれに。すいたお方に逢ひもせで。すかぬ客衆に呼び
こまれ。山寺の入相告ぐる鐘の聲。諸行無常はエ、まゝの川。
わしはむしやうにのぼりつめ。花の頂どれいて見やう。花はう
つらう物なれど。葉ころ惜しけれ。おしければころ。みどりの
めだち色ふかみぐさ。

ひがし山八景長うた

見わたせばひがし山のはるのけしきや。さをんばやしにふくあ

らしは。さんしのせいらんとうたがはれ。かわらおもてのまさ
このいろは。こうてんのぼせつもかくやらんおもしろのはなの
みやこや。ちしものさくらにしくはなし。かも川のながれの末
にもくふねは。えんはのきはんか。さへわたるせいすおじのか
ねのこへ。えんじのばんしやうのひいき。るれしら川のすさき
に。つばさのさんらんすは。へいこのらくがんともいひつへし。
さてれうせんつきの月かげは。とうていのあきのよ。これにはよも
まさらし。さてまたぎようんのせきせうは。つりたれて。あげ
まさきに遊ぶものを。

如意ヶ嶽 は俗に大の宇山といひ往古浄土寺回祿の時其本尊飛んで
此上に至り光明を發せしとの故事により弘法大師始めて火を大字
形に焼叙賢に供したるに始り毎年八月十六日の夜に點火するが實

に壯觀なものです

如意山

賴山陽

萬箭刺河漢。盪摩雙日光。野腥龍戰敗。
岫黑虎逃藏。華萼階闌亂。戈鋌天地荒。

傷心如意岳。夢卜墮蒼茫

名月や西にもによつど如意か嶽

山の端を雪にも見はや大文字

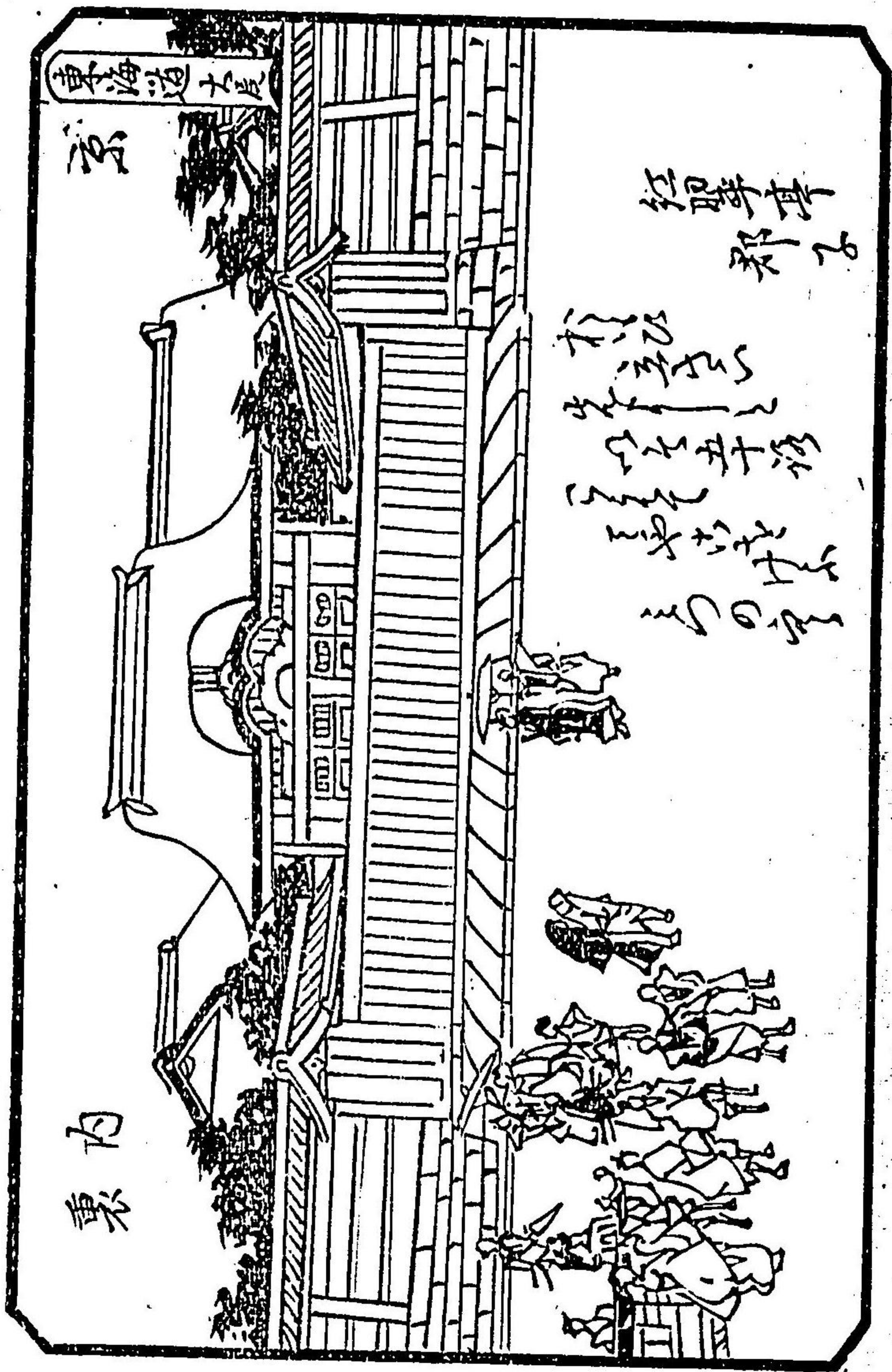
薄雪や大の字かゝる山の草

冬枯れの穴の深みや大もんし

禁裏御所 現今の御所は安政二年の御造營に係り面積二十五萬坪宮
殿連比し森巖にして壯麗です

過禁門

齋藤拙堂



金殿崔嵬出三彩霞

御溝汨汨走清沙

春風不隔仙凡界。吹落人衣上苑花。

内裡へも寝着て入りぬ菅蒲賣

西 吟

軒月や内侍所の棟の草

嵐 雪

二條離宮 は緋田信長が築きし舊二條城として一九び明智光秀之を

焼きしも徳川氏再び之を築き今は離宮となつてゐる

加茂川 は愛宕郡岩屋の山陰より出て鞍馬貴船高野の三川を合せ潺

湲として砂礫の間を南に流れ京都市内を貫き桂川に注ぐ

鳴沂小宮作 市村水香

酒半醒時睡亦醒。夕陽人坐讀書亭。

莫言一尺虚窓小。三十六峯容得青。

信 友

つらよひの鴨の河瀬のゆふかせになつる流れて行くところかな

あやめ草加茂のかり橋今いく日

嵐 雪

夕立や雙六の賽鴨の川

木 導

三條大橋

は京都三大橋の一つで天正十八年豊臣秀吉小田原征伐の

時初めて架設したるものにして欄干の擬寶珠は紫銅を用ゐてある

此橋は京都より各地へ至る起點にして里程元標の在る所です

三條橋

林 道 春

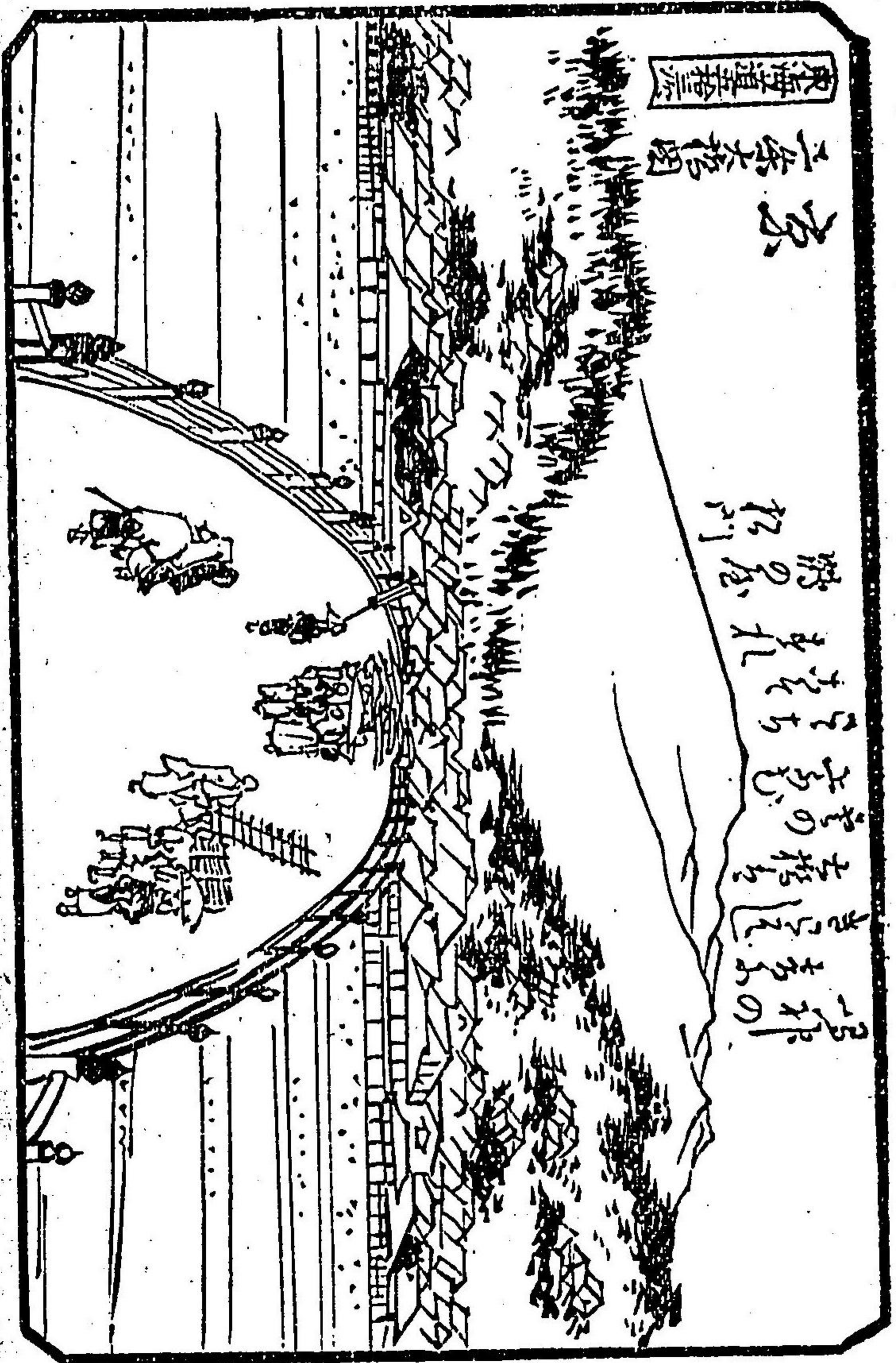
鴨河晝夜逝溶々。見性老來今又逢。

橋是三條臥波浪。平安城尤有三青龍。

更衣見ん三條の人通り。只 丸

月こよひ鶴の出べさ森もなし。常 矩

四條大橋 は京都唯一の鐵橋にして東は祇園新地を控へ西岸には先



東海道巻三

三條大橋圖

斗町の遊廊軒を並べ京都繁昌の中心に當りしかも三條橋より四條橋までの間は納涼の本場とも稱すべし所謂四條河原にして夏盛の頃は其賑ひ他に類を見ぬ程です

四條涼棚

後藤松陰

熱鬧笙歌夾岸聲。紅燈照爛晝三更。

可憐鳴子川頭月。閑却清涼幾夜月。

切箔の四條につよく納涼かな

沾 德

杜宇寺も覆のすく通り

涼 菴

五條大橋は元は今今の松原橋の處に架かつてあつたが豊太閤大佛建立の時今の處に移された

五條橋囁目

寺門靜軒

清流激石碎瓊瑤。第五條橋回首初。

閑臥被衾何處所。山容無箇不舒々。

五條橋

十返舎一九

かかる身は牛若丸の裸にて辨慶縞の布子こひしき

薙刀の五條もすし橋の月

支 考

五條阪背戸に見下す葵かな

宣 朗

泉涌寺は伏見街道の北に方り禪、眞言、天台、律四宗兼學にして近頃は皇室の御陵地になつてゐます

東福寺は伏見稻荷の北に接する臨濟宗の名刹にして明治初年の失火に佛殿方丈等大半を焼失したが有名なる通天橋は辛くも其災を免がれ秋は紅葉の勝地として杖を曳くものが頗る多い

通天橋

頼 山 陽

上方山暝宿禽喧。澗底紅楓照酒尊。

通天橋

頼 山 陽

上方山暝宿禽喧。澗底紅楓照酒尊。

非下有鐘聲相報道。何緣知得是黃昏。
 星なくて紅葉の橋の往來かな 信 徳
 橋裏に日は残りけり村もみぢ 辨 石
 三十三間堂 は天台宗蓮華院と號し鳥羽上皇が一千一躰の觀世音を安置されし名刹です

三十三間堂

小林卓齋

佛地曾開演射場。滿階草色入荒涼。
 惜無武士試猿臂。三十三間依舊長。
 つくくし去年の芝矢の枝折かな 又 玄
 押あふてさる暑からん佛たち 朝 雨
 帝國京都博物館 は豊國神社の南隣に在り古器物、繪畫、彫刻織物等數千品を陳列し常に開館して諸人に縱覽せしむ

豊國神社 は大佛殿の南隣に在る別格官幣社で秀吉の靈を祀りしもの社の後背なる阿彌陀ヶ峰は其遺骸を葬りし所、同神社の門前の耳塚は豊太閤朝鮮征伐の時彼地より敵の捕虜の耳を削り盥藏とし來りしを埋めし所です

過阿彌陀峰下有感

松本奎堂

霸氣消沈草木荒。去鴻逝水跡茫茫。
 苔碑一片不知處。空向寒山弔夕陽。

阿彌陀峰狂詠

高駿河守

多くとも四十八にはよも過し阿彌陀ヶ峰にともすかゝり火
 豊國や夜の椿の落る音 團 水
 耳塚に蚊のなく聲も哀なり 兎 士
 花ふらすあみたが峰の嵐哉 貞 室

大佛殿方廣寺 是天正六年豐臣秀吉の創立せし名刹にして昔は偉觀を極めしが慶長七年回祿にかゝり秀頼之を再建されしも寛政年間又々雷火に焼かれ其後は本尊の大佛もまた半像となりしは惜むべし歴史上著名なる當寺の巨鐘は長一丈四尺徑九尺二寸厚一尺にして亦秀頼の鑄造せしものです

方廣寺

頼 杏 坪

會費黄金十萬駄。造成百丈大沙那。

佛與檀越俱灰滅。耳塚蕭條春草多。

十返舎一九

大佛の御堂は雲に入とてやは是は大きなもの天じやう

大佛や横寐もならず御入滅

不 玉 液 村

わんといふ大佛殿やほととぎす

大佛や眠るものならおほる月

鳥 醉

永き日や大佛殿の普請ころ

李 由

西大谷 は五條坂の上在る本願寺派本願寺の廟所にして慶長年中

今の智恩院境内より此地に移せしものです

清水寺 は清水坂の東に在る靈場にして坂上田村麿の造立に係り公

が信心渴仰せられし觀世音を祭り其本堂は懸崖に架して南に向き

前に舞臺を設く是れ世にも名高き清水の舞臺です

登清水寺

中 島 雪 樓

飛樓百尺架空斜。下視京城十萬家。

杏渺河流分野甸。透迤宮闕入煙霞。

氷清乙羽山中水。風暖田村堂上花。

有女懷春行樂地。不知何處得同車。

清水寺狂詠

十返舎一九

境内に植し櫻はさまざまなく手も澤山な千手観音

清 水狂詠

同

舞臺から飛んだ咄しは清水に冷かされたる身ころくやしき

繪馬見る鼻へちりこむ櫻かな

許 六

ひかし誰雪の舞臺の日のけしき

其 角

舞臺から杖を飛ばせて雪見哉

露

川

八坂神社は官幣中社にして祭神は素盞鳴尊稻田姫八王子を合祀し

たもので毎年七月二十日に執行する祇園會は實に海内無雙の祭禮

です

祇園神會

陽 棕 隠

畫幕猩氍毹客壓欄。千家社會極三娛歡。

冷炎繁瘠元應異。今日渾成富貴看。

祇園新地は四條大橋より東幾條の市坊を總稱したる所にして青樓

妓院軒を並べ名媛美姫の驥北として縉士粹客が遊遊を争ふの所、

有名なる都踊は年々春風駘蕩の候に催される

おもしろや祇園林のあさの月

季 吟

雪の日も團の風や二けん茶屋

木 ト

圓山公園は古の所謂眞葛が原にして東山風光第一と稱す一

株の垂枝櫻ありて花時には夜に入り篝火を焚て之を見せしむ祇園

の夜櫻は即ち是です

圓山賞雪

頼 三 樹

銀闕瑤臺接座浮。瓢然訝我落瀛洲。

城中大雪抽身去。醉倚東山第一樓。

吉水や鉢にたへし冷し物

介 我

漕出せや圓山寺を花の上

淡 々

初雪に眞葛が原の妾かな

其 角

東大谷は西大谷に對する稱へにて大谷派本願寺の祖廟ですおほたにはほんぐわんじ 佛殿及

び御廟は元祿中に造營せられしものです

知恩院は洛東第一の巨刹にして淨土宗の總本山ですきんねん 有名なる巨鐘

は寛永年中に鑄造されたるもの重量は二萬貫ある

知恩院

菊池三溪

一吼鯨音緩出山。古香臺是小仙寰。

僧皆高貴分金葉。佛亦多情愛翠巖。

欲悟捨華微笑意。靜看朝雨暮雲間。

旗亭日落東風冷。箇々紅粧買醉還。

知恩院の一重櫻はさきにけり

信 德

燕も傘たつぬるか知恩院

祇 德

大鐘や夏木の櫻しづかなり

昨 鳥

南禪寺は臨濟宗五山の一にして萩の名所です

釋 隆 岳

南禪寺

花間浴鼓夕陽天。野店招人藤架連。

欺玉黎祁風味好。傳聞證得是南禪。

又 遠山裕齋

殿閣重々翠靄封。山禽驚散講時鐘。

應無僧眼迷朱碧。不種閑花只種松。

黒谷光明寺は淨土宗にして法然上人開基の所ですくろやうくわんめいじ 境内にある熊谷

堂は蓮生坊の居住せし跡にて又熊谷と敦盛の塔がある

黒谷

遠山裕齋

華鯨一吼晚涼微。想像英雄剃度時。

放下屠刀即成佛。清風薰徹白蓮池。

談合谷は鹿ヶ谷の上二町許りにあり俊寛僧都の別荘たりし所です

鹿溪

梁川星巖

細逕如蛇入草行。殘霞一綫界溪明。

山僧盧舍不知處。黃葉滿林幽磬聲。

俊寛の面影見ゆる案山子哉

荆口

夜や明ん談合谷の雉子の聲

木朶

銀閣寺は鹿ヶ谷の北に在りて足利義政閑居の別荘で世に東山殿と

號し其遺命により寺としたのです東求堂中に在る四疊半の茶の湯

の間は義政の特に愛せられし所にして茶亭に於ける四疊半の濫觴

です其庭園は茶道相阿彌が義政の命によりて造りしもので山水の
布置其妙致を極めて居る

東求堂義政將軍茶室

齋藤拙堂

鞞轂紛紜被劫灰。堂々覇主賦歸來。

可憐十笏點茶室。恰是周王避債臺。

紅梅や加の銀閣寺やふれ垣沽 徳

石も木も時代の苔やあきの雨西 吟

池水に箔はちりけり蓮の花蝶 夢

西陣は京都北西部落の總稱にして日本第一の織物の産地で其名は
内外に轟き實に我國工藝の淵叢富國の根元である

西陣錦坊

關本三泉

機聲札札夾街喧。錦綵家家織得繁。

始信帝部雲漢是。匹夫匹婦盡天孫。

下加茂神社は官幣大社にして祭神は玉依毗賣命大山咋命の両座で
す社殿は天武帝の白鳳六年に創立せられ攝社末社の數甚だ多く莊
嚴無比の大社にて有名なる葵祭は毎年五月十五日に執行され祇
園會と共に京都の壯觀です

下加茂祠

菅茶山

祭儀肅穆豆籩清。千歲羊存文物明。

樂闋餘音無覓處。一林間月水錚々。

醉顏に葵こぼるゝ匂ひかな 去來

上加茂神社は下加茂より半里許り北に在りて祭神は別雷神です
毎年五月五日には騎射の古例により起りたる競馬の神事がありま
す

上加茂

江馬天江

地邊松杉老。苔痕終古青。人來生畏敬。

草木自神靈。

卯の花やいつれの御所の加茂詣 其角

七段の外を乗りけり足揃へ 許六

金閣寺は足利義滿退隱の地で世に北山殿と稱へ莊觀奇美を極め後
ち寺となして鹿苑寺と號け三重の閣は金箔を以て鍍め南天の床柱
萩の枝の違棚等は特に人口に膾炙してゐる

鹿苑寺

清水雷首

將軍別業北山傍。康曆年間卜此郷。
樓閣塗金皆剝落。林池凝碧已淒涼。
蛛縈遺像威何在。僧導遊人說又長。

鹿苑眞成多鹿跡。登梯傍檻意徒傷。

八疊の楠の板間をもる時雨

しづかさば赤松石を夕しぐれ

菜の花やろの中を行金閣寺

紫野大徳寺 是臨濟宗にして紫野に在ります境内なる眞珠庵は一休

禪師の舊庵です

大徳寺

寺門 靜軒

回頭世事片雲浮。山色依然歲月流。

多少英雄骨皆朽。磬聲冷響法堂秋。

遊はよや嫁菜にもかるむらさき野

寺中みな爐をひらさけり紫野

北野神社 是菅原道眞を祭れる官幣中社にして世人は之を北野の天

神といひ有名なる大社です

菅廟梅花

頼 春 風

昔日瓊姿倚御筵。狂飈吹起落江邊。

群花婉媚柔枯急。一樹流芳千載傳。

前大僧正慈圓

曇るべきさうと世の末を照してやあら人神は天降にけん

定 家

千早振神のきた野に跡垂て後さへかゝるものやおもはん

梅ならば南の枝や北野殿

春彦とたつねきた野や子規

檜皮には筑紫の苔や青あらし

六角堂 是六角通 鳥丸東に在る天台宗の名刹にして聖徳太子の開

基で本尊は一寸八分金銅の觀世音です堂の形六角なるを以て名けられ一向の宗祖親鸞が此觀音の靈夢に感じて開宗せしことは人能く知つてゐる所です

六角堂

鈴木 蓼 處

自從奇木創奇工。六角之堂棟亦隆。咫尺紅塵侵不到。觀音長住紫雲中。

六角は京の最中やほととぎす

盈 斧

本能寺は寺町三條北に在る日蓮宗の名刹にして天正十年織田信長が明智光秀に弑せられたる舊地です

本能寺懷古

阪谷 朗 廬

唯問三溝深淺。不問三江海恩。凶豎狂態常事耳。絶世英雄眼何昏。鼠穴不塞宏厦敗。驕心從來誤大計。君不見烟戒咫尺留

其踪。本能寺裏關夜鐘

新京極は三條通より四條通まで南北に通じたる一帯の地にして諸興行物や飲食店ありて遊人織るが如く東京の淺草大阪の千日前と同じく京都第一の熱鬧地です

西本願寺は西六條に在りて眞宗本願寺派の本山です殿舎高閣の莊嚴華美なると枚擧に遑あらず東本願寺と共に諸國の信徒實に夥た

し

西風に何ぞ自力の扇つれ

宗 因

にし東六條とのゝはたんなかな

許 六

東本願寺は東六條に在る眞宗大谷派の本山にして明治二十五年の新築に係り市内第一の大伽藍です

東寺は西八條に在る眞言宗の名刹にして有名なる五重の塔は高く

聳そびの其その北きたなる瓢箪池ひやうたんいけは燕子花かきつばたの名所めいしよです

鐘かねかすみ松まつくれやすき東寺とうじ哉

苗代なはしろや東寺とうじの塔たふの水みづかゝみ

似 船
朱 廻

比叡山ひゑさんは京都きやうとの東北とうほくに聳そびゆる海面上かいめんじやう二千八百尺にせんぱちやくの峻嶺しやくしゆんれいにして日枝ひえ

又または比江ひゑとも書かき其最そのもも高たかき處ところを四明嶽しやうめいだけといふ山中さんちゆうに延曆寺えんりやくじあり

傳教大師でんけうだいしの創立さうりゆうにかゝり歴代れきだいの尊信そんしん淺あからず古來こらい歴史上れきしじやうの事蹟じせき甚な

はた多く有名ゆうめいなる巨刹きよさつです

比叡山

劉 石 舟

間坐まざ叡峯ゑいほう雲霧うんむ間ま。清風せいふう六月りくご拂はら仙臺せんたい。

玉皇ぎやうわう當日とうじつ籬前しきまへ雪ゆき。一いつ點てん香爐かうろ是こゝ此山こゝさん。

傳 教 大 師

明あけらけく後のちの佛ほとけのみ世よまでも光ひかりつたへよ法のりのともし火び

貫 之

山高やまたかみみつゝ我われこしさくら花はなかせは心こゝろにまかすへらなり

讀 人 知 ら ず

我戀わがこひのあらはにみゆる物ものならば都みやこのふじといはれなましを

同 狂歌 宗 長

立たちわかかれやすらふほどの朝あさぼらけ身みも手ても足あしもひへの大雪おほゆき

門松かさまつの上うへやみやこのふじ聳そびへ 竹 亭

かすみけり日枝ひえは近江あふみの山やまならず 言 水

月つきすむや比叡ひゑも都みやこにうしろ向むか 團 水

愛宕山あたごさんは京都きやうとの西北せいほくに在ありまして山上さんじやうの愛宕神社あたごじんじやには伊弉册命いさだすのみこと。

火産靈命かぶすめのみこと。雷神かみなり。破无神やぶなしを合祀がっしし山麓さんろくより上のほり五十町ちやうあります伊

勢せ參宮さんみやうより歸かへるものは必ずかならず當社とうしやに詣まうづるの例れいとし又また火災かさいを防ふせぐの

神としてある

愛宕山

久野繁山

天象非難伺。

星河晝亦浮。

樓臨飛鳥背。

人坐宿雲頭。

驟雨來千里。

涼風控數州。

披衣高檻上。

肅颯似清秋。

八條おはいきみ

なき名のみたかをの山といひたつる君はあたどの峰にやある覽

しぐるゝや愛宕の寺の晝鼠

友元

酒盛や立て舞ふのは何天狗

方山

鞍馬山は京都の北方に在つて老杉巨檜蔚然として全山を掩ひ怪岩

奇石逕路を遮りて誠に深山幽谷をなしてゐます山腹に鞍馬寺牛若

丸劍術練磨の所なとの舊跡がある

遊鞍馬山

松本奎堂

滿城紅紫已摧殘。 只有山中花可看。

落日荒祠春寂寂。 晚櫻低壓石欄干。

平なりきかむすめ

墨染の鞍馬の山にいる人はたどるくも歸りきなゝん

安法法師

おはつかな鞍馬の山の道しらで霞の中にまどふけふ哉

齋院中務

住なる、都の月のさやけさに何かくらまの山はこひしき

はつ寅や牛若殿のほうと鞘 白紙

花咲は告げよ尾上の番おろし 其角

竹さりて鞍馬を下すあらし哉

巴 靜

嵐山 は大堰川の南岸に在つて櫻樹多く芳野山の櫻と共に高名です
此櫻樹は龜山帝の時吉野より移し植ゑたものたろうで大堰川に架
かりし橋は吐月橋といひ頗る好風景な所なのです

嵐山 瀬山 陽

青徑一曲水迢々。 夾水櫻花影亦嬌。

桂楫誰家貴公子。 落紅深處坐吹簫。

渡月橋 釋 周然

欲問昇天路。 長橋踏月度。 淺水鳴珮環。

恍聽仙娥步。

嵐山 後宇多院

あらし山これも吉野やうつすらんさくらにかゝる瀧のしらいと

同 狂歌 種 松

しら雪と見る目に咎はあらし山鹽とちらすな花の惣領

同 芭 蕉

六月や嶺に雲おくあらし山

あらし山敷のしげりや風のすぢ

夕立や晴もくかたにあらし山 禹 柳

渡月橋

星の夜や二人出たる渡月橋 枝 朶

橋を行く月もいろがし明やすし 蝶 醉

三尾山 とは梅尾、横尾、高雄三山の稱にして何れも紅葉の名稱で

其中にも高雄が第一です

梅の尾は草に巢をくへ燕 其 諺

あさのくれ別に悲しき高山寺

千那

高雄

頼山陽

萬株楓葉疊秋霞。下有溪流一道斜。

最是初陽射休隙。紅雲堆埋掣金蛇。

なき名のみ高雄の山といひ立る君は愛宕の峯にや有らん

八條のおほい君

高辨上人

清瀧の瀬々の岩なみ高雄山人も嵐のかせろ身にしむ

うつくしや風までも高雄山 勇 山

此秋のくれ文學われを殺せかし 其 角

高雄山松にうつれば日も青し 曉 臺

向日町驛

上の京都へ四哩七鎖 新橋より三百三十四哩九鎖
下り山崎へ四哩六十鎖 神戸より四十三哩四鎖

驛は山城國乙訓郡向日町大字向日にあり

山崎驛

上の向日町へ四哩六十鎖 新橋より三百三十八哩六十九鎖
下り高槻へ六哩五十鎖 神戸より三十八哩二十四鎖

驛は山城國乙訓郡大山崎村にあつて逆臣明智光秀の滅亡せし所です

天王山は驛の北に在る有名なる古戦場にして山腹に觀音寺と寶寺

とがあります何れも風光に富んでゐるから一遊すべき所です又其

麓に離宮八幡宮がある

經山崎

頼杏坪

明智可笑大不明。狂悖徒成大悪名。

本能寺裡一炬火。似爲他人乖奇榮上。

縞素一戦成新覇。智是豊公大横辰。

ながさ日や暮ぬに歸る油うり

木 因

男山八幡おとやまやまは山崎驛やまざきぎより一里淀川いづみがはの對岸八幡たいがわんの庄鳩しやうにきヶ峯みねの北麓ほくろくにあ
る官幣大社くわんぺいたいしやにして石清水八幡いししみづといひ應神帝おうじんてい、神功皇后じんぐくわうこう、玉依姫たまよりひめの
三座さんざを祭まつる當社あたしやは貞觀じやうくわん年中大和國大安寺おんあんにんじの沙門行教しゃもんかうけうが宇佐八幡うさやま
に參籠さんらうし神託しんたくを蒙かかむり勅許ちよくきよを得て此地このちに勸請くわんせうしたるふです神しん殿でん玉垣たまがき
回廊くわいらう等皆朱塗しゆぬりで其壯麗そのさうれい言語げんごに盡つくされぬ

石清水

吉田松陰

男兒山如古。男兒人已非。廣柳車中客。
淚帶暮雨飛。

謁石清水神廟志私感

賴支峰

老木生雲氣。風霜侵古祠。

碧甃連澗谷。朱壁畫蛟螭。

七道謳歌日。三韓朝貢時。

恩波流不息。長憶太平甚。

後土御門内大臣

神も見よすがたばかりおとやま男山おとやま心はふかき道みちにいりにき

法印頼舜

男山おとやま岑みねよりてらす月つきかげはくもらぬ人の心こころにぞすむ

紀貫之

いはしみづ松まつかけ高くたかかげ見みて絶たえくもあらず萬代よろづよまでに

堅丸

春風はるかぜのきはふともなし花盛はなざかりみかけてたのむ男山おとやまには

齒染庵元家

貴妃きひ櫻人さくらひとやうらまん見みかろしのめかけにもつたよい男山おとやま

十六夜いざよひの八やはたにかゝる黒くろみかな

新月やいつをむかしの男やま

其

角

高槻驛

上り山崎へ六哩五十七鎖
下り茨木二哩五鎖

新橋より三百四十五哩四十六鎖
神戸より三十三哩四十七鎖

茨木驛

上り高槻へ二哩五鎖
下り吹田へ四哩三十一鎖

新橋より三百四十七哩五十一鎖
神戸より二十九哩四十二鎖

驛は攝津國三島郡高槻町大字高槻にあり

驛は攝津國三島郡茨木町大字茨木にあり

總持寺

は茨城村の東北十餘町に在る眞言宗の巨刹にして仁和二年

藤原高房の開基に係り西國巡禮二十二番の札所です現今の堂舎は

豊臣秀吉が片桐且元に命じて再建せしめたるものです

勝尾寺

は驛の西北三里十町にありて寶龜八年の建立に係り西國巡

禮二十三番の札所です現今の殿堂は源頼朝の再建せしものです

吹田驛

上り茨木へ四哩三十一鎖
下り大阪へ四哩六十四鎖

新橋より三百五十二哩二鎖
神戸より二十五哩十一鎖

驛は攝津國三島郡吹田村にあり

箕面公園

は驛の西北三里豊島郡箕面山中に在り紅葉の名所です其

委しきは神崎驛の部に記しやす

大阪驛

上り吹田へ四哩六十四鎖
下り神崎へ四哩六十八鎖

新橋より三百五十六哩六十六鎖
神戸より二十哩二十七鎖

驛は大阪市の北部なる梅田町にあり近頃改築せられ現今日本第一の

大停車場と稱せられ實に大阪の一大關門となつてゐる線路は各地に

接続す東海線は東より山陽線は西より神戸を経て來り會し其他關西

西成諸線皆こゝに會合し其雜沓云はん方なく一日の乗降は平日にて

も一萬を下らぬとのとです

大阪市

は日本三都の一にして我國第二の都會です淀河の河口に跨

り大阪灣に臨んでゐる雄大の市街です古へは浪速又は難波と稱へ

仁徳帝の都し給ひし所です夫れより下りて天正年中豊臣秀吉茲に

築き大阪府を建てしより現今に至り益々繁昌し人口は實に八十二

咲やこの梅をなにはの橋の友
ほととぎす裸て起て橋ふたつ

涼 菟 山 來

第五回内國勸業博覽會 是天王寺逢坂の下今宮の地(十萬坪)に建築され未曾有の大規模にして三十六年三月一日より全七月卅一日まで開會され觀覽者實に五百萬人の大多數に登りしといふ其開會式は四月二十日に舉行され畏くも 今上陛下には御親臨遊ばされ此盛典を御舉行遊ばされた附屬水族館は堺市大濱公園内に開設されたが其詳細は當時の新聞雜誌其外之に關する書籍が出版されてゐるから一々記さぬ

大阪築港 東洋第一の大規模なる大阪築港は二千二百餘萬圓の經費を以て明治三十年十月十七日起工式を擧げし以來着々工事を進め今や其半ばを成功した同事務所にては特に公衆の便を圖り毎日案

内船を出して港の内外を巡覽せしめてゐる

水道 是總工費金二百五十六萬餘圓を以て明治二十五年八月より工事に着手し廿八年十月落成したが其後人口の増加と市街地の擴張せられたるため三十年に更に百餘萬圓の豫算を以て附加工事を起し去年四月十二月工事を竣り今は八十萬人に給水し得る水源地は東成郡都島に設け淀川の水を引て沈澱濾過せしめ之を唧筒仕掛にて大阪城跡に設けし貯水池に送り夫より大小の鐵管を引きて全市に配水するのです

淀川改修工事 淀川は畿内中の大河にして源を琵琶湖に發し桂木津等の數川を併せ平野の間を曲流して大阪灣に注いでゐるが土砂は年々河底を高め流域を狭めて水害を爲すこと度々なれば洪水防禦を兼ね舟楫の便を開くの目的を以て明治二十九年より三十八

年度に至る繼續事業として總費金九百九萬四千圓にて初め二ヶ年は土地買入等に費したる後卅一年四月一日より起工し現に工事最中に屬してゐる前記築港水道と共に大阪の三大事業です

三大橋とは淀川に架たる天満。天神。難波の三大鐵橋を稱するものにて天神橋の如きは全國有數莊麗の橋なり浪華橋より天満橋までの間は夏季納涼舟出で、京都の四條河原に譲らぬ賑はひです

浪華橋賞月

廣瀬旭莊

橋上憧憧萬人行。橋下簇々千舟橫。
 稍到三更皆散去。誰看落月搖情處。
 露白風清無限思。唯有沙禽與我知。
 浪花江や橋と舟とに月いくつ

我 黑 翠 鶯

天満天神 は菅公を祭れる有名の大社にして參詣人晝夜絶ゆる殊に七月廿五日の夏祭は大坂第一の盛なる觀物です

天満祭

紫 秋 村

次第河中送火毬。橋門下鎖往來休。
 兩岸萬人齊拍手。神輿已識在龍舟。

天満天神狂詠

十返舎一九

なに一つ御不足もなき御繁昌直事は自由自在天神
 中之島公園 は中之島の東端に在りて長さ五町許り園内老樹に乏しきゆる幽邃の趣なけれども左右は大川に臨みて風景亦よるしく殊に夏夜の散策に適し大旅館數軒あり又大阪公會堂博覽會の爲めに新築せられ住友氏の寄附になれる圖書館は目下工事中です
 豊國神社 は中之島公園にあつて豊臣秀吉を祀れる別格官幣社です

木村長門守重成の石碑 中之島公園の東端に在り重成が豊臣家に
盡したる功績は皆人の知る所なれば別に記しません

大阪納涼臺 は中之島の東端なる劍先に突出し構造したるものにし
て長七十五間幅十五間の船形の棧橋で臺上には飲食店其の他娯
樂の設備ありて入場料大人三錢小兒一錢五厘を出さば己がし涼
を取ることが出来る

津村御堂 は御堂筋本町に在る本派本願寺の別院にして俗に北の御
堂といひ構造頗る宏壯にして恰も小城廓を見るやうだ

難波御堂 は御堂筋南久太郎町に在る大谷派本願寺の別院にして俗
に南の御堂といひ其規模の宏大なること北の御堂に譲らぬ
阿彌陀ヶ池 は西區北堀江和光寺の境内に在る橢圓形の小池にして
中央に寶塔が建てゝある今を去ること千三百五十年前欽明帝の十

三年百濟より佛像を齎し來りたる時守屋大臣が帝を諫め翌十四年
其像を難波の堀江に投せしことは史を讀みし人の能く知る所にし
て此池は即ち其舊蹟だといひ傳へてゐる

四ッ橋 は西横堀と長堀が交叉して十字の流れをなす其川々に架し
たる上繫橋。下繫橋。及び炭屋橋。吉野屋橋の四橋のとです何れ
長二十間許の橋で正方形をなしてゐるのが一寸變つた所です吉野
屋橋の南畔なる烟管店播磨屋といふがある所謂源藏張の本舗です

四 橋 廣 瀬 旭 莊

一市新開傍水濱。 劇場幾處客如雲。
橋頭月落觀方畢。 屐響東西南北分。
四橋の角立けるよ冬の月 乙 州
すいしさに四ッ橋を四ッわたり鳥 來 山

よつ橋に一筋たらず天の川

よつばしも一度に更て鳴ちどり

道頓堀と千日前とは市中最も熱鬧の地にして道頓堀には五座の劇場

櫓を並べ芝居茶屋、割烹店等櫓比して晝夜賑ふ又た千日前は

見世物諸興行物軒を列べ喧々囂々として東京の淺草と比すべし

道頓渠劇場

廣瀬旭莊

拂面黄塵滃渤生、夷橋南畔萬人行。

昇平不必簫韶樂、唯在劇場絲管聲。

道頓堀狂詠

十返舎一九

いつとても調子くるはヒ三味線の道頓堀の賑ひはるも

高津宮は仁徳天皇を祭りし大社にして高津一番町に在り舞臺に上

れば大阪全市は双眸の裏に集り心氣豁然として爽快を覺ゆ維新前

までは鳥居の傍らに遠眼鏡を置て參詣人を悦ばしめ茶店の湯豆腐
又世に名高し

高津看雪

廣瀬旭莊

夙識仁皇民竈歌、千年遺跡此經過。

今朝三十萬家雪、轉比當時烟影多。

高臺晴景

筱崎小竹

高臺晴景好、宸詠入炊烟、仁徳千年遠。

瓦甍今接天。

藤原時平

高き屋に上りて見れば煙たつ民のかまどは賑ひにけり

高津狂詠

十返舎一九

もろくの神に春競べしたまはばこそ高津の宮のとうと

眠らずに幟見てるよ岸の上
覺こし若葉やこけて西の海

叔慮にもにきはふ春の庭のかま

才 一 音 磨
は せ を

四天王寺

は今を去ること一千三百有餘年用明天皇の二年聖德太子

十六歳の御時創建し給ひし靈場にして佛刹の最初勅願所の濫觴

です昔は八宗兼學なりしが今は天台宗に屬し境内の廣さ東西八町

南北六町七堂伽藍嚴然として天に聳ゆる自ら尊崇の念を起さしめ年

中參詣者の絶ゆることなきが中にも春秋二季の彼岸には參詣人頗

る多し

天王寺

彼崎小竹

春秋享祀豐聰王。

萬舞洋々兩部張。

喟嘆浮屠傳禮樂。

千年無恙頌聲長。

遊天王寺

廣 願 旭 莊

桃花行不盡。次第入山門。高塔抽雲背。

靈鐘返鬼魂。地古佛威尊。太子多遺跡。

是非誰與論。

天王寺狂詠

十返舎一九

何となく心はうちやう天王寺われを忘るるありがたさには

梅ちりてろれより後は天王寺 鬼 貫

未來記にありや彌生の子規 二 柳

菜の花やひかりのどけき天王寺 天 府

鐘かすむはや此あたりはつ櫻 ろ の

俗人の門なつかしや春のころ 其 角

天下茶屋 は天王寺村に在りて住吉街道に當り阪堺鐵道の停車場の

ある處です道の西側に二軒の茶屋ありて何れも天下茶屋と云てゐる元と茶人紹圃の棲みし舊蹟にて豊臣秀吉堺の政所へ往復の途次此の茶亭に入りて其風景を賞せられしと言ひ傳へてゐる

生國魂神社 是高津生玉町に在る官幣大社にして生國魂。足國魂の二神へ大物主神を合せ祀り境内櫻樹多く眺望に富んでゐる

生國魂狂詠

十返舎一九

御普請も新九に見へて金物の光りますなり生玉のみや

生魂や蓮のかれ葉も詠めもの

杏 廬

生玉や神無月も神さひす

古 聲

櫻宮 は淀川の東岸に在りて天照大神を祀り境内櫻樹多く川を隔て造幣局と相對し花時にはなかくの賑ひである

上巳遊櫻祠

廣瀬旭莊

七夕未涼端午暑。重陽雖好奈悲秋。

一年第一論佳節。三月初三最勝遊。

柳浪深邊停畫舫。櫻雲缺處露危樓。

風光洵美盪吾思。不省人間有客愁。

造幣局 は天滿川崎町に在り日本國中に於ける最も古き洋式金工場にして明治四年の創建に係る庭園は淀川の清流に臨み櫻樹多く四月花時には例年一周間場内を開放して一般の人に觀覽を許す

泉布觀 は前記造幣局と地續きにありて元は同局に屬し度々聖上行在所となりし所で今は同局の手を離れ宮内省の所管となつてゐる近來日本美術協會大阪支會をこゝに置いて時々美術展覽會を催すところが本年博覽會の開期中豊公遺物の展覽會と千瓢會が此所に開かれた

に開かれた

從騎肅聽皆含淚。見伏不去叱起之。
西望武庫賊氛惡。回頭幾度觀去旗。
既殲全躬支傾覆。爲君更貽一塊肉。
剪屠空復膏賊鋒。頗似祁山與絲竹。
脉脉熱血灑國難。大澗東西野草綠。
雄志難繼空逝水。大鬼小鬼相望哭。

撫子にかかるとる泪や楠の露

芭

蕉

正行のおもひを鷹の山別れ

史

邦

わかれとや聲をひるむる子規

君

里

四條暖神社 河内國四條暖飯盛山の西麓にあり關西鐵道四條暖驛より九丁楠正行及其一族を祭り明治二十二年に創建されし別格官幣社です土地小高くして眺望に適し境内亦櫻躑躅の花盛りに

は好き眺めですこゝが楠正行戦死の古跡なるとは沿く人の知る所です

四條暖

谷如意

四條暖上陣雪飛。忠孝両全從古稀。
箭鏃題名名不滅。千秋照耀廟門扉。

楠正行墓下作

生駒山人

刈谷村傍有古墳。土人傳時小楠君。
可憐征北生前恨。化作峰頭一片雲。

神崎驛

上り大阪へ四哩六十八鎧 下り西宮へ四哩二十七鎧

新橋より三百六十一哩五十四鎧 神戸より十五哩五十九鎧

驛は攝津國川邊郡小田村にあり 當驛より南に尼ヶ崎北は福知山に至る阪鶴鐵道は此驛に交叉してゐます

尼ヶ崎 是驛の南一里に足らぬ海岸中國街道の衝に方る繁昌の市街にして舟車の便よく名勝古跡多し中にも本興寺末寺の一なる栖賢寺は禪宗十刹の一に數へられ天正年間羽柴秀吉の山崎合戦軍議を定めたる處です

箕面公園は 神崎驛より阪鶴鐵道に乗りかへ同鐵道池田驛より一里許り人力車の便がある明治三十一年より大阪府の公園地となり山を包み谷に臨み風景絶佳にして紅葉の名所です又龍晏寺と名くる古刹あり寺を後にして進めば高さ十一丈幅三間計りの瀑ありこれ有名なる箕面の瀧です

遊箕面山

頼山陽

萬珠濺沫碎秋暉。仰見懸泉劃翠微。
作意山風爭氣勢。橫吹黃葉滿前飛。

仁和寺後入道法親王覺性

木のまより有明の月のをくらすは獨や山の岑を出まし

西吟

一の富得て一聲やはとゞさす

鷺水

瀧ふけて箕面に隣る野分かな

柳居

吹れては瀧へ織こむもみぢかな

有馬温泉 は神崎驛より六里神戸より五里廿七丁西宮より六甲山道を行けば大約三里餘り古へより有名の温泉にして其由來最も遠く聖武天皇の御宇に僧行基之を修めたが其後荒果てしを建久年間仁西上人之を復興し豊太閤又之を修補せられ其後度々改築せられ維新後益々繁榮を増した其構造は日本風の宮殿作りにて浴室を別湯並湯の二種に分つ性質は多量の鹽化那篤留謨、鹽化加留謨、鹽化叟謨を含み之を嘗むればや、鹹味を帶てゐる又九鳥地獄、蟲地

獄なといふ炭酸氣の發散強き温泉ありて鳥または蟲の之に近づけ
は窒息して死する所もある市街を湯山町といひ戸數四百許り旅宿
二十餘大氣清涼にして夏季の避暑には最も適してゐる

有馬

後藤松蔭

破竹風乾山上下。洗毫日晒屋西東。
多少人家碧篁裡。南製筆北編籠。

有馬雜詩原二首

森春濤

温泉寺畔晚鐘殘。出浴豐肌汗未乾。
銀管吹烟香馥郁。青山影裡倚欄干。

人磨

皆人の笠にぬふてありま菅ありての後もあはんとる思ふ

前大納言爲定

くれ行は隔つる霧にありま山ありとも宿や尋かねまし

宗輔

吾妻見ぬ人のためとやうつすらんここに有馬のふしのしは山

炭焼のけふりをすくに有馬富士 玄 梅

春かせや湯女の笹原わけて寝ん 許 六

三階に有馬の軒やふくあやめ 孟 遠

花の香や幕湯へのろく山おろし 般 亮

涼風をゆるめてもとす温泉口哉 祖 月

西ノ宮驛 上り神崎へ四哩二十七鎖 新橋より三百六十六哩六鎖
下り住吉へ五哩二十一鎖 神戶より十一哩七鎖

驛は攝津國武庫郡西宮町にあり

大國主西神社 驛を距ること僅かに十五丁俗に西の宮の蛭子と稱
へ名高い社です陰曆正月十日は十日戎にて阪神の信者參拜する

もの非常に多く爲めに臨時列車を發す大阪の今宮戎は思ふに此西の宮戎を移したものであらう

神も釣たれて柳の池すすし

廬

足たたぬあるじも留主か神無月

蝶

元

打出の濱は西の宮附近海濱の稱へにして神功皇后御出産遊ばされし名蹟です

し名蹟です

住吉驛

上り西の宮へ五哩二十一鎖
下り三の宮へ四哩六十三鎖

新橋より三百七十一哩二十七鎖
神戸より五哩六十六鎖

驛は攝津國武庫郡住吉村にあり

住吉神社は驛の西隣に在社にして天太大神。底筒男命。表筒男命の三座を祭る後神功皇后を合せ祀りたと申します境内壯麗にして且廣く社背には神功皇后の釣竿竹といふがある又社地の北方に御影山といふがある攝州東成郡にある住吉大社とは別です

住吉狂歌

法橋顯昭

住吉と今はたのまし津の國のなにはたかへる所なりけり

御影

藤原基俊

世にあらは又歸りこん津國のみかけの松よ面替りすな

岡本の梅林は驛の東北半里餘り前に田圃を控へ後に山を負ひ麓より頂に至るまで梅樹ならざるなく花の時候には香ばしき雲は山を埋め人家を没し頂に登れば梢の間より大阪灣を隔て、紀州の翠巒を眺め頗る佳景です

観岡本梅花

廣瀬旭莊

到處紅梅映素梅。濃霞淡雪畫中開。
將軍著色未三看了。已展營邱破墨來。

三の宮驛

上り住吉へ四哩六十三鎖
下り神戸へ一哩三鎖

新橋より三百七十六哩十鎖
神戸より一哩三鎖

二七八
驛は攝津國神戸市元町通にあり生田神社布引の瀧等の遊覽所は編を
改め神戸驛の部に記し此編はこゝに筆を擱く

古今雅俗 東海鐵道名所記 終

不許複製

明治三十六年八月一日印刷
明治三十六年八月五日發行

定價 金參拾錢

校閱者 水谷弓彦
編述者 東輝文
出版者 岡島眞藏
發行所 岡島書店

大阪市東區備後町四丁目
(電話東千〇四十二番)

印刷所 大阪南區谷仲之町 岡島活版製所
(電話東八百二十番)

新聞紙一ヶ月金四拾錢

大阪毎日新聞



廣告料五號活字一行金四拾貳錢

吉村大次郎君著

渡米盛衰の三刻

洋装美本
全一冊
實價金貳
拾五錢郵
送費四錢

本書は最近數年間米國に在る在留五萬同胞の黒衣宰相と唄わ
れたる吉村先生が米國上陸後の我が出稼者に尤も適當なる職
業、農業、商業及び各種の労働等と綱を分ちて説明せられた
るものにして著者在米中の設立に係る同胞共濟機關等の記事
は渡米者の尤も意を強くするにたるものなり叙事文一致に
して分り易く渡米のしるべと相待て渡米者必讀の好書とす

發賣元

大阪市東區備後町四丁目 岡島書店
電話 東十〇四十二番

新聞紙一ヶ月金四拾錢

大阪毎日新聞



廣告料五號活字一行金四拾貳錢

渡米盛衰の手記

吉村大次郎君著

洋裝美本
全壹冊
實價金貳
拾五錢郵
送費四錢

本書は最近數年間米國に在て在留五萬同胞の黒衣宰相と唄わ
れたる吉村先生が米國上陸後の我が出稼者に尤も適當なる職
業、農業、商業及び各種の勞働等を綱を分ちて説明せられた
るものにして著者在米中の設立に係る同胞共濟機關等の記事
は渡米者の尤も意を強くするにたるものなり叙事文一致に
して分り易く渡米のしるべと相待て渡米者必讀の好書とす

發賣元

大阪市東區備後町四丁目 岡島書店
(電話 東千〇四十二番)

近刊豫告

正岡 藝陽 君 著

理想の女學生

女學生眞に墮落せるか—今の男子は婦女を毀けるを以て榮譽となしつゝあり—女學生眞に墮落せるか、果して然らば之が救済の方法如何、同情なきの批評は終に空論のみ、是等あらゆる問題に對して、著者は尤も熱誠なる同情を以て諄々其解決を與へられたるものなり、婦人問題—婦人の研究に偉大なる歴史を有するの著者、其觀察微妙、着眼奇警行文亦尤も流暢を極む、苟も女學生自身及び其父兄關係者の最も一讀を要すべきものなり

洋裝新形美本
全 壹 冊
實價金廿五錢
郵送費四錢

發行元

大阪市東區備後町四丁目

岡島書店

大坂簿記學校創立以來年來を關する十二年の卒業生の多數は各社會銀行の要職を占むる其簿記の書籍は其校長和田昌夫氏の著述なり其用科及習用として最も適當の者なり

教科 商用簿記學

修正七版 實價九拾錢 郵稅拾錢

教科 會社簿記學

修正六版 實價八拾錢 郵稅八錢

教科 銀行簿記學

近刻

教科 工業簿記學

修正四版 實價四拾錢 郵稅六錢

新式簿記習字帖

實價六錢 郵稅二錢

和田昌夫氏著

實撰官用簿記

再版 實價七拾五錢 郵稅八錢

教科 鐵道簿記學

實價四拾錢 郵稅六錢

岡島書店

大阪市東區備後町四丁目

(意主御特) 旅館 (號商と置位)

京三條小橋畔

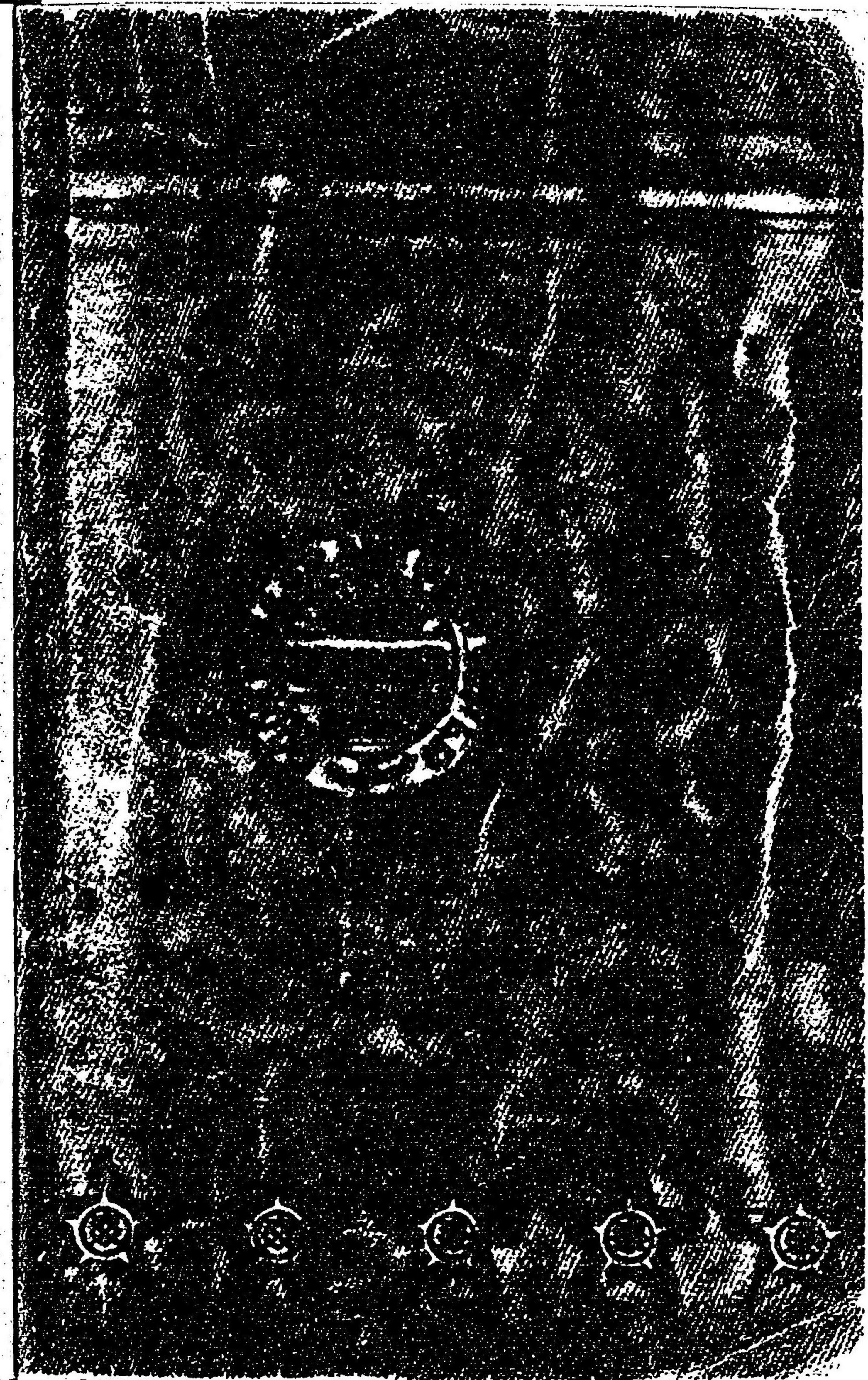
弊館の位置は市中の中央なれば名所古蹟の御遊覽市内の御用達には至極御便利七條停車場より三條小橋迄電氣鐵道乗車賃金壹等金九錢二等金六錢途中にて車夫及び宿引等外の宿屋御勸め申候共決して御採用なく位置と商號とに御注目被下御投宿永久に御引立の程奉希上候也

登
宿
名
吉
留
家
電話
三
三
三
三

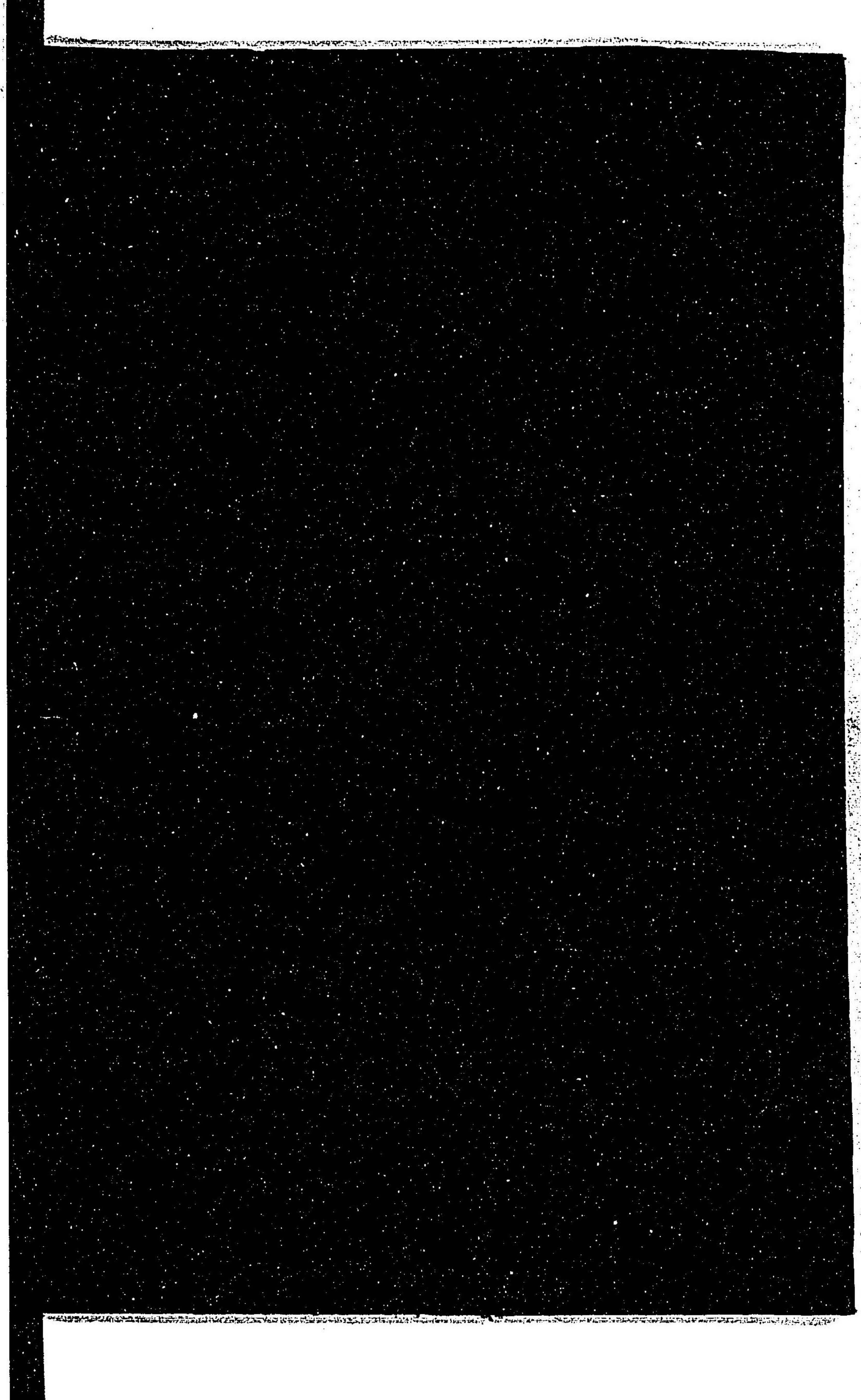
(本館) 京都二條小橋郵便受取所

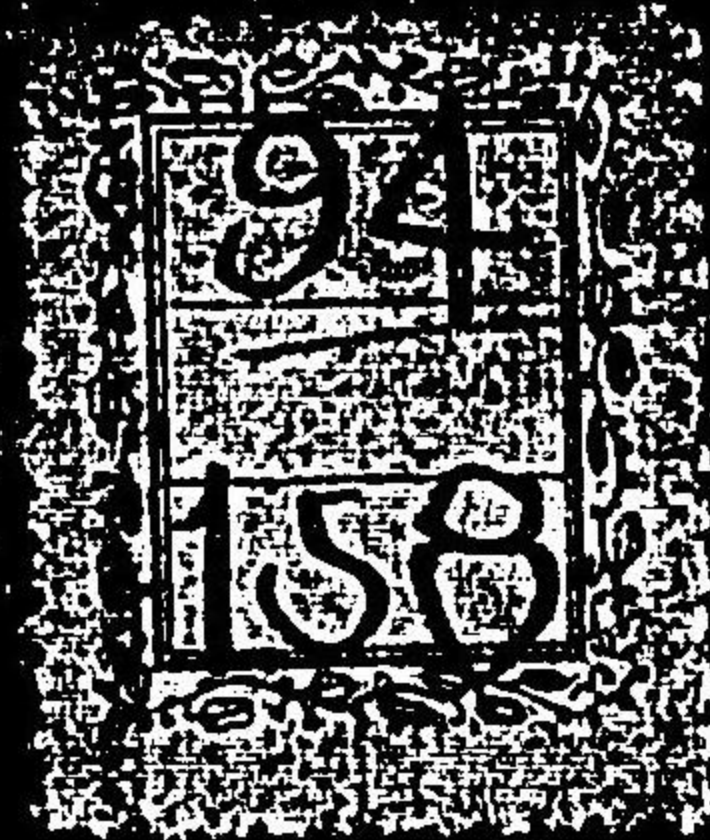
(御注意) 御着京の節七條停車場附近に近來種々の方法を利用し盛んに廣告致居候吉岡屋といふ宿屋有之候右は弊店に聊も關係無之全く無縁の他人に御座候間若し車夫等が都合にて私方支店杯と申し強て御誘引仕候共前記の次第に付決して御採用無之様特に御注意被下度御知已之諸君にも宜敷御披露被遊度候

94
158



94
158





024983-000-1

94-158

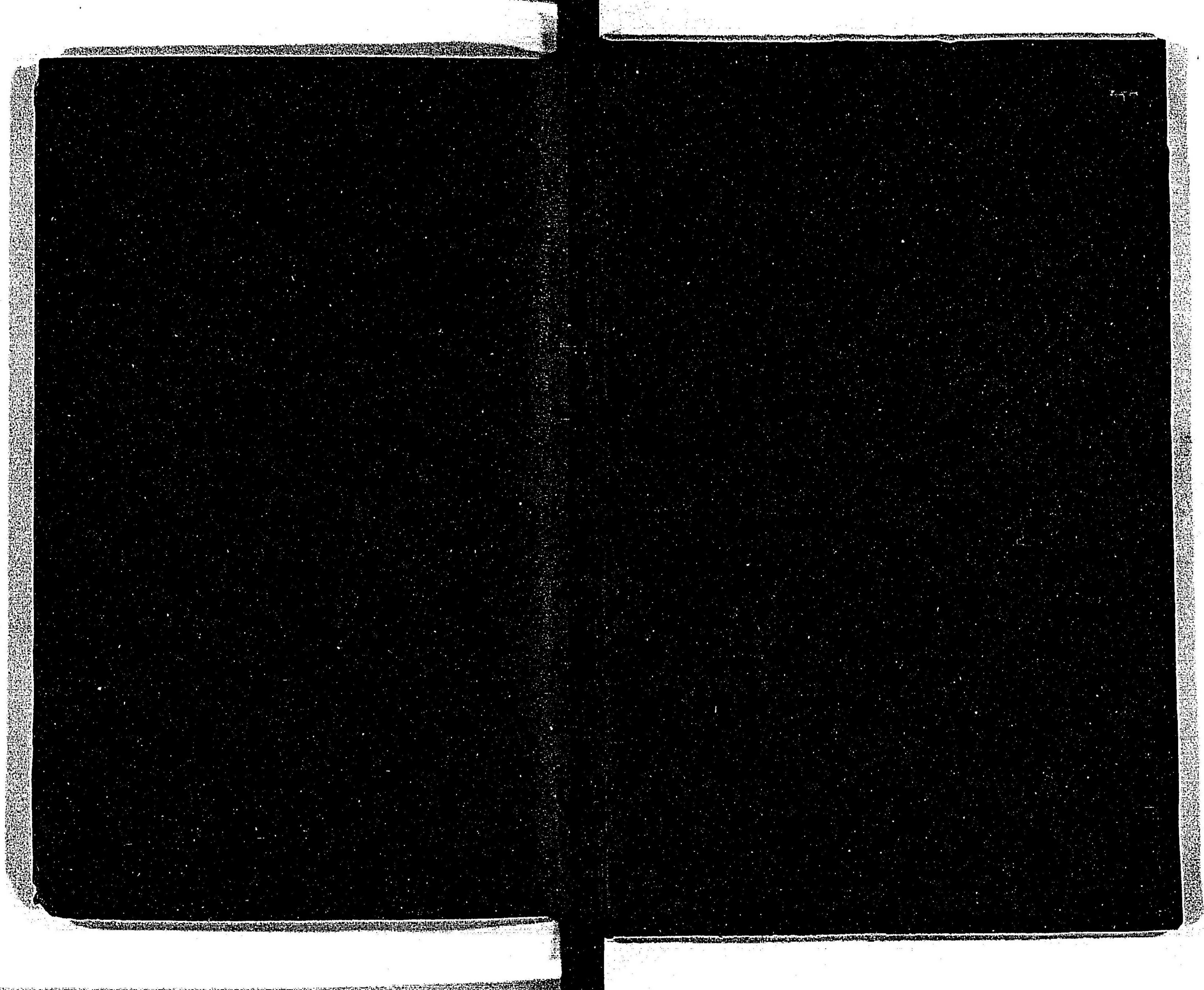
東海道鐵道名所記

東 輝文/編

M36

ADC-2318





94
158